

新制中等新國文 卷三

375.9
Mi20
資料室

41762

教科書文庫

4
810
41-1938
20000 33913

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

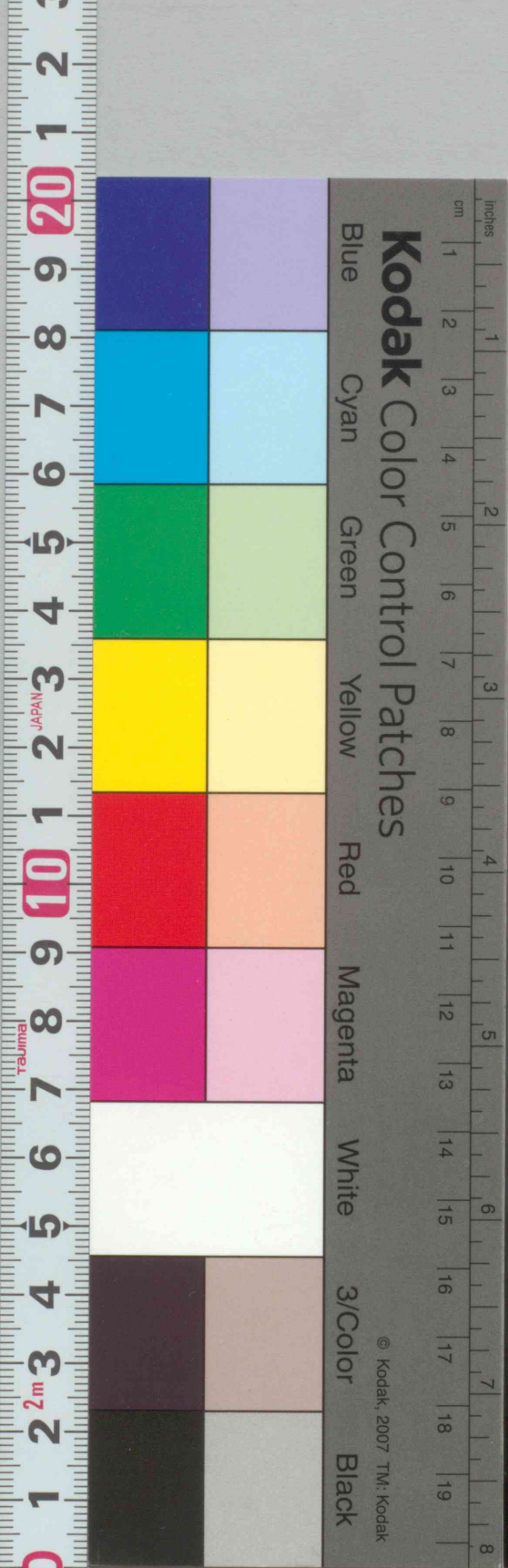


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

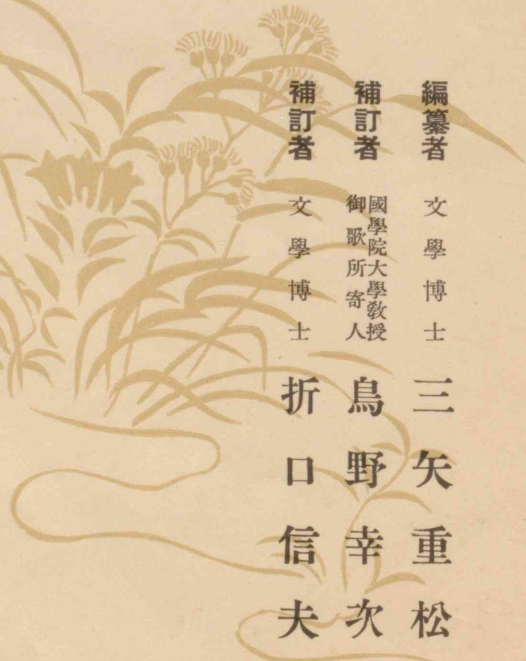
375.9

M120

文部省檢定濟

中華學校國語漢文教科書
實業學校國語教科書
昭和三十三年二月十五日

新制中等新國文



編纂者

文學博士

三

矢

重

松

補訂者

國學院大學教授
御歌所寄人

鳥

野

幸

次

補訂者

文學博士

折

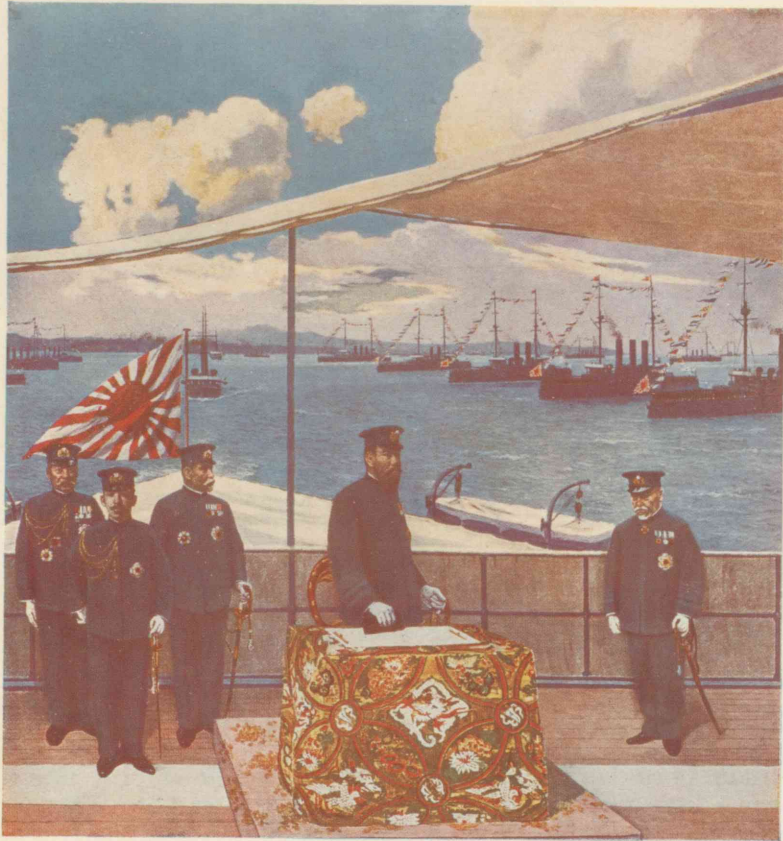
口

信

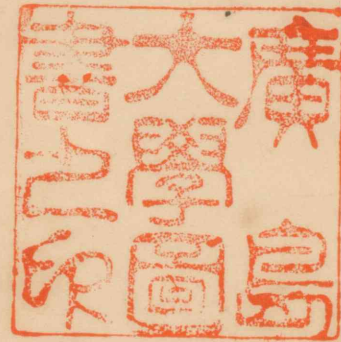
夫

株式會社

文學社



凱旋觀艦式
(筆郎太鉦條東・畫壁館畫繪苑外宮神治明)



例
言

— 本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

— 本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に互りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次 (卷三)

一	歌聖明治大帝	佐々木信綱	四
二	日章旗	松波仁一郎	三
三	草の匂	前田夕暮	六
四	童心	北原白秋	七
五	短歌評釋	若山牧水	四
六	新緑	五十嵐力	六
七	二挺の鎌	鳥野幸次	四
八	松坂の一夜	佐佐木信綱	五
九	蓮	豊島與志雄	五
一〇	三人一兩損	大町桂月	七
一一	雲龍の圖	薄田泣菫	七
一二	板倉重宗	新井白石	八

不武院

一三	清正と茶道	中村秋香	八
一四	夕立	徳富蘆花	九〇
一五	造化のたくみ	土井晚翠	九五
一六	鳥飼藏人	五十嵐力	九八
一七	形	菊池寛	一〇一
一八	西郷と大久保	山本有三	一〇七
一九	秩父宮殿下に扈從し奉りて	林權助	一一三
二〇	山の木と大鋸	志賀直哉	一一三
二一	白馬尻より大雪溪へ	鈴木文史朗	一一四
二二	蜃氣樓	橘南谿	一一四
二三	訓練の相違	金子堅太郎	一一五
二四	東郷大將		一一五
二五	我が國民性	芳賀矢一	一二六

附 録 國語假名遣一覽

一 歌聖明治大帝

佐 佐 木 信 綱

和歌は我が國の歴史と共に起り、歴史に伴つて榮えて居る。随つて和歌と皇室とは最も深い關係がある。御歴代の中、九十餘代の天皇は、それ〴〵御製が歴史や歌集に遺つて居るし、或は立派な御集の傳はつて居る天皇もあらせられる。御製の遺らぬ天皇の御中にも、實はおありになつたのが世に傳はらなかつたものもおはしまさうから、歴代の天皇は殆ど皆和歌を詠じ給うたと申してもよい。それ故に天皇にして歌聖におはす御方も少なくないが、就中人皇第一代にまします神武天皇には、或は戦争の始る前に士氣を鼓舞する爲に歌を作り給ひ、或は戦ひの合圖に詠み出でさせ給ひ、

佐佐木信綱 竹柏園の號がある。明治五年三重縣に生る。萬葉學者、歌人、文學博士。
 石原村
 集一シ

鼓 鼓



或は嶮峻なる山坂の戦ひに兵站部が續かずして兵士の疲勞せるを犒ひ給へるなど、色々の御製が遺つてゐる。實に神武天皇は、わけても勝れた歌聖とたゞへ奉るべきである。

統一トウ

我が明治天皇は、新しき大日本國を建設し統治し給うた聖天子であらせられて、その御治績の上より、第二の神武天皇と稱へ奉るべき御方である。而して明治天皇は、和歌の道に於ても亦神武天皇と均しく御堪能にあらせられた。これ實に、古今其の揆を一にす、と申し奉るべきである。さりながら、神武天皇の御製はやうやく國史の中で拜見するのみで、僅かに數首しか傳はつて居らぬが、明治天皇には數萬首の多きを遣し給うたと傳へ承つて居る。歴代の天皇に御製ありと雖、かく多數の和歌を詠じ給うた御方はない。既にその

一 治 治

其の揆を一にす 先聖後聖
 其ノ揆一也。(孟子)

一 遣 遣

量に於て古今獨歩と申し上げてよろしいが、其の質に於ても、亦神武天皇と相並んで古今の雙壁と申し上げるべきであると思ふ。

かつて我等の承ることを得たところについて案ずるに、御製には明かに二つの部類があらせられる。一は天皇が尊き大御心から國家を思召し、御祖先を敬ひ國民を憐ませ給うた御製、即ち教訓的とも申し奉るべきもので、他は月に花に折々の情懷を抒べさせ給うた御製、即ち文學的とも申し奉るべきものである。

教訓的と申すべき御製には、聖徳のすぐれて高い天皇の御性格が炳乎として顯はれ、その御製を拜誦すれば、さながら聖賢の書を読むやうな心地がする。しかもそれは尊い大

壁壁

情懷—ジョウクワイ

御心から自然に涌き出た御詠であるから、調子が高く、誠實がこもつて、殊に有難く拜せられる。これ畢竟、天皇の高い御性格の致すところで、天皇の御製の一首一首は、その御性格の反映と拜し奉られるのである。こゝにその一二を挙げ奉れば、

國のためたふれし人を惜しむにも

思ふは親の心なりけり

四方の海みなはらからと思ふ世に

など波かぜのたちさわぐらむ

この類の御製は一々挙げ奉ることの出来ないほどである。なほこゝに注意すべきは、天皇の御製が日清、日露の二大戦役を経て愈、御上達遊ばしたことである。即ち國運の進歩發

涌り湧

國のため、の御製 明治三十七年の御作。

四方の海、の御製 同前。

類—ルキ

達に伴うて御文藻も愈深く鮮かにお進みになつたやうに
拜察されることである。白露戦役に當つての御製には、特
すぐれたものが多いやうにうかゞはれる。

子らは皆いくさの場ばに出ではてて

おきなや一人やまだもるらむ

の御製の如きは、老いたる農民を感泣せしめた。また、四方の
海うみの御製は英詩に譯されて外人の間に傳はり、帝王の詩聖
と稱へ奉られるに至つたとさへ承つて居る。

文學的と申すべき御製について案ずるに、自然の情景を
ありの儘にお歌ひになり、その中に何となく雅みやびやかな趣を
拜せられるのが御特長であるやうに拜誦される。かの後鳥
羽土御門順徳の三天皇は和歌をいたく好ませ給ひ、且つそ

子らは皆、の御製 明治三
十七年の御作

後鳥羽天皇 人皇第八十二
代。
土御門天皇 人皇第八十三
代。
順徳天皇 人皇第八十四
代。

の時代には多くの歌人が輩出して、和歌の歴史の上に新古
今風といふ一時代を形作つて居るが、その三天皇の御歌風
の巧緻といふやうな點は、明治天皇の御製の上には、少しも
認められず、極めて自然の御諷詠である。それが、如何にも天
皇の御製として調子が高く拜せられる所以であると思ふ。

つかさ人まかてし後のゆふまぐれ

心しづかに書かをみるかな

浪のおと遠ざかりゆく引潮に

蟲のねたかし濱の松原

春秋の花にもみぢにこひしきは

むかし住みにし都なりけり

つかさ人、の御製 明治四
十年の御作。

浪のおと、の御製 明治四
十一年の御作。

春秋の、の御製 明治四十
年の御作

家なしと思ふかたにも燈火の

かげ見えそめて日は暮れにけり

或は題詠に、或は行幸の御製に、かくの如く四時の風物をお詠じになつたのに殊に秀逸が多い。それは固より大御心の赴かせ給ふところによるのではあるが、年久しく御製を拜見し奉つた故御歌所長高崎正風男の歌風にもよるところがあらせられるであらう。高崎男は桂園の流れを汲む八田知紀の高弟で、古今集の歌風を宗としたものである。天皇が歌といふことを詠じ給うた御製に、

おもふことうちつけにいふ幼兒の

言葉はやがて歌にぞありける

ま心をうたひ上げたる言の葉は

家なしと、の御製 明治三十七年の御作。

御歌所 宮内大臣の管理に屬し、御製・御歌並びに歌御會に關する事を掌る所

高崎正風 舊鹿兒島藩士。男爵。歌人。明治四十五年薨。年七十七。

八田知紀 舊鹿兒島藩士。歌人。明治六年歿。年七十五。

おもふこと、の御製 明治四十年の御作。

ま心を、の御製 明治四十一年の御作。

ひとたび聞けば忘れざりけり

とあるによつても、和歌に對する窺慮の程が拜察せられるのである。

和歌の歴史を概観するに、その最も榮えたのは、天平时代と延喜・天曆の時代と建久・正治の頃とであつた。即ち萬葉古今新古今それらに我が國の文學史を飾つて居るのであるが、明治の聖代も、この三時代に比べて勝るとも劣らぬ歌壇の盛況を呈して居る。これ偏に上の好ませ給ふ所下これに學び奉れる爲であると申さねばならぬ。

（文と筆）

天平时代 聖武・孝謙・淳仁・稱徳の四天皇の御代に天平二十年、天平感寶一年、天平勝寶八年、天平寶字八年、天平神護二年がある。これを總稱して天平时代といふ。（一三八九—一四二六）

延喜 醍醐天皇の御代。

天曆 村上天皇の御代。

建久 後鳥羽天皇の御代。

正治 土御門天皇の御代。

（一八五〇—一八五九）

二日章旗

松波 仁一郎

日章旗は、我が大日本帝國の國旗であります。諸外國の國旗にそれ／＼、大切な意味が含まれて居るやうに、日本の國旗にも深い意味があるのであります。私は今、我が日章旗を色の上からと地理の上からと祭祀の上からと國體の上からとに分けて、御話致さうと思ひます。

まづ色の上からいへば、全體色そのものは、たゞ赤いのが赤く、黒いのが黒いまで、何といつて別段意味のあるものでありません。併しその色を見る人に種々の感じを起させて、それが色の意味のやうに思はれるのであります。さうして其の感じは人々によつて、相違はあるにしても、大體にお

松波仁一郎 明治元年（二五二八）和泉國（大阪府）岸和田藩に生る。法學博士。帝國學士院會員。

體ニ於

相違一サツキ。

いては一致して居ります。我が日章旗は白地に赤でゑがか

れて居ります。その白色は、全く汚のない、清淨潔白の意味を表して、實に結構な色合であります。西洋では、これに靜とか平和とかいふ意味を寓せて居ります。戰の時の降參旗は、この色であるが、これは二心のないことを表すものです。赤色には日本も支那も西洋も皆同じ意味を持たせて誠を表します。赤心丹心などいふ語も、是等の意味から出たのです。西洋では、また熱心といふ意味を、これに持たせて居ります。熱心の極は劇しくなり、危いことにもなるので、すべての警戒の標などにも赤色が用ゐられて居ります。

そこで日本の國旗は、その熱心その誠の塊であるから、いざ破裂といふ曉は、ひどく危いものであるが、平和の白色で

ゑがく

これを包んで居るから心配はないのです。併し外國からの仕向によつては、いつ破裂して、彼等を驚かすかも知れませぬ。これ全く日本人のきつい氣象を表した好い標本ではありませぬか。

地理上からいへば、日本は東に位して居る、日の出づる國であります。日章旗はこの意味を表して居ります。然も太陽が東から出て次第にその光を西に及ぼすやうに、東の勢力を益、西に及ぼさうとする進取の氣象が籠つて見えます。

次に祭祀の上の事ですが、何れの國の國旗も、皆祭祀の意味を含んで居ります。祭祀といふ語がよく當つて居らぬなら、敬神といつても宜しいのです。皇祖天照大神は、また日の神と申し上げます。日章旗がその日の神の御影に象られた

日出づる國 推古天皇の朝
隋に贈られた國書に、
日ノ出ヅル處ノ天子、
書ヲ日ノ没ル處ノ天
子ニ致ス。恙ナキヤ否
ヤ。
とある。
象ニ象

のは、知らず識らずの間に、神の御護があるやうな心持して、國民の欽仰の念を強めるものと思ひます。

國體の上からいへば、我が日本は、上に萬世一系の天皇を戴いて、その天壤無窮であることは、恰も太陽が始もなく、終もなく、また一つの缺點もなく、眞丸に輝いて居るやうなものであるから、これに優つた好い章しるしは、他に決してあるまいと信じます。

つまり日本の國旗はいかなる點からしても申分のない章と思ひます。どうか此の國旗の精神を全國に普く及ぼして、國民の愛國心を引き立て、日章旗の名譽を海外までも輝かしたいと存じます。

—我が日章旗—

欽仰—キンギヤツ

三草の句

前田 夕暮

今日も私は白いお握りとゆて卵と、落花生とを持つて向うの林に行く。

巴旦杏の木の立つてゐる——其の枝にはもう青い果がなつてゐる——村の小學校の庭を横切つて、往還へ出る。この村はどこへ行つても杉木立と桐畑とである。桐は今花盛りだ。

往還を荷車を挽いて行く若い男がある。車の上には新しい蓆カシを敷いて、一人の老爺が乗つてゐる。顔を上に仰向けて、道のはたの桐の花を褒めながら、大きな聲で何か話しノ、行く。挽いてゐるのは息子で、乗つてゐるのは父親であるこ

前田夕暮 名は洋造。歌人。明治十六年神奈川縣に生る。

往還—ワックワン

とがわかる。

「今日は、よいお天氣で……。」と老爺がいふ。

全くよいお天氣だ。畑には麥が青く穂立ち、その麥畑のなかに桐の花が咲誇つてゐる。向うを見ると、赤い屋根が林間にぼつり／＼建つてゐる。

道は少し下りになつて田圃に出る。田圃には紫雲英が咲き盛つてゐる。狐の牡丹や、きんぼうげが光つてゐる。すかんぼが赤く穂を出して、風に吹かれてゐる。苗代田には水が見るから心地よく張られて、案山子がぼつんと立つてゐる。

田川の橋を一つ渡ると、其處に櫟の並木がある。其の並木路をぼつり／＼と歩いて行くと、道は檜と杉と櫟との古い森にはひる。其の森のなかには細い幽かな道が、木の枝のや

すかんぼ 蓆科に屬する植物。すいば。苗代田—なはしろだ

はひる 這ひ入るの約言。

うに分れてゐる。どの道を辿つて行つても、人の家の庭に出られる。庭にはよく地車が挽きすててある。鶏がきよとくと遊んでゐる。

庭の隅の日あたりには苗場があつて、甘藷苗や、茄子苗が盛上つてゐる。胡瓜苗はもう麥畑の畝間に移植されて、黄色い花をつけてゐる。道は杉の植林のなかを通つてゐて、いよいよ幽かになる。孟宗藪のそばを通つて少し行くと、急に明るくなつて、視野が濶くなる。其處には可なりに廣い草原が横たはつてゐる。草原には、もう野薔薇が咲きかけて、風にゆられてゐる。すい〜と茅花が青く抽きてゐる。なかには、白く穂を出してゐるのもある。空には雲雀が鳴いてゐる。あたりは一面の麥畑である。麥畑の向うに孟宗竹が青黄いろ

地車 ちぐるま。重いものを運ぶための車。低くて四輪ある。

くなびいてゐたり、家の屋根だけ見えたり、墓が四つ五つあつたり、行く人の頬被りが白く見え隠れしたり、若葉が燃えあがつてゐたり、林が青く風に吹かれてゐたりしてゐる。私は冷たい草の上に腰をおろして、たつた一本生えてゐる原つばの若木の楯の蔭で、風呂敷を披いて握飯を食ふ。鹽が少し利きすぎてゐるので、却つてうまいが、一碗の飯を握つただけなので、掌にのせてみると、一口に食はれさうである。それを私は少しづつ惜しんで食ふ。そして水筒から番茶の冷えたのを飲む。雲雀が一つすぐ私の頭の上に鳴いてゐる。初夏の雲雀の鳴き聲は何となく寂しい音色だ。今頃は、大抵の雲雀は野良から曠野の草山へ移つてゐるのであるが、穂麥の畝間に、三番卵をても孵して、つい山に歸りそこねて

あるのであらう。私は握飯を食ひ終ると、また歩き出す。草原を横切つて少し行くと、道が麥畑の畦の所でなくなつてゐる。かまはずに畦を歩いて行くと、畑と畑との間に、道とも何ともつかず、人の歩いた跡が一筋幽かに通つてゐる。その道を歩いて行くと、麥の穂がさや／＼と風に鳴つて、私の肩や背に觸れる。畑中道にはたんぼ／＼の花が咲きつゝいてゐる。一株掘つて新聞紙につゝんで抱へて行くと、白く乾いた往還に出る。往還には一臺の荷馬車の轆の長いのが置かれてある。車の上には黒い野良着に、それでも赤い模様のある帯をして、手拭で顔を隠すやうにした若い百姓の女が二人、足を長く投げだして、何かひそ／＼と話してゐる。

少し行くと、馬が道のはたで青い麥を食つてゐる。その先には黒い牛が路に立ちはだかつてゐる。麥畑のなかに新しく家を建ててゐる人達が見える。柱が白々と光つてゐる。又少し行くと十字路に出る。露座の石佛が道の端に合掌してゐる。佛の足のあたりには、たんぼ／＼が黄いろく叢り咲いてゐる。木の葉に載せて何か上げてある。四辻の一軒家の障子には、「酒さかな」と書いてある。その家の細い道をはひつて行くと、櫟や犬しでの混生林が私を待つてゐる。林には涼しい風が枝を動かしてゐる。私はその林のなかにはひつて、少し疲れたので、草を藉いて横になる。私の顔の直ぐそばに銀蘭が白く動いてゐる。手のところには羊齒がうす紅く若葉を出してゐる。日の光がちら／＼とこぼれて来る。仰いで見る

犬しで 一名そろ。到る處の山野に自生する落葉喬木。

と、大しでの軟かい若葉を透して日のありどころがわかる。風に梢が揺れる度にちら／＼と光がこぼれるのだが、少しもまぶしくはない。此處で寝ながら、私はまた風呂敷を披いてゆて卵を食ふ。

林のはづれは野路になつてゐるので、時折人が通るが、私の寝てゐるのに氣がつかない。小娘が大きな青い薬罐を提げて通る。野良へお茶を運んで行くのである。

私はいつしかよい心持になつて、ついうと／＼眠る。頭の上で木の葉が涼しさうにさゝやいてゐるなと思ひながら、二三十分も眠つたらしい。私は自然に眼覺める。手に何か軟かい草の葉が觸れるので、折取つて見ると、蕨である。私は歸りにはこの蕨と羊齒とを掘つておみやにしよう。

おみや
お土産。

私は寝ながら色々な空想をする。去年の地震の時に、庭に野宿した涼しさを思ひ出すと、今年の夏は武蔵野の林間を家族連れてテント旅行をしようと考え。先づ八疊敷位のテントを一張り買入れる。疊椅子を二脚と、やはり折疊みの



出来る卓子を一脚、それに白い毛布が三四枚あれば、それでもうよささうだ。さう／＼石油ランプ一箇に懐中電燈も要

る。食料品は晝間附近の村から買ひあつめれば心配はない。さて私達は、いよ／＼林間のテント旅行に、一週間位の豫定で出かける。そして晝間は野を歩き廻る。疲れる頃に日が

暮れる。林間にテントを張つて一夜の寢床をつくる。石油ランプと思つたが、提燈の方がよい。提燈に灯を入れて木の枝に吊す。其の下で簡素な晚餐を済ます。子供達は疲れてゐるので、すぐにテントの中にはひつて寝て仕舞ふ。長男の方は二三年つゞけて、學校から箱根の仙石原にテント旅行に行つてゐるので、馴れてゐる。長女の方も今年からは、學校から行けるのであつたが、まだ地震の憂があるので、この夏は一年休むことになつた、といふやうな話をしながら、やがて眠つて仕舞ふ。私もそのそばに寝る。テントの上の木の葉が涼しく風に鳴つてゐる。なに、蚊がゐるだらうつて。さうかな、なるほど、蚊が居るかな。少し位なら蚊遣りを焚いて我慢しよう。どうせ疲れてゐるから、すぐ寝ついて仕舞ふ。

朝は早く、空がしら／＼明けになつた頃起きる。無論子供が先づはね起きて、大きな聲で戯れるので、私もすぐ眼を覺ます。顔は林の出はづれの田圃へ行つて灌漑用水で洗ふか、村に行つて、どうせ飲料水を貰つて來なければならぬから、其の時冷たい井戸水で洗ふことにする。さう／＼、アルコールランプも一つ必要だ、湯だけは沸かさなければならぬいから。

村の牛乳屋から買つて來た搾りたての牛乳とパンとで、簡単な朝飯を済ませる。子供達はクレオンで林間の寫生をはじめ、私は組立椅子と卓子とを持出して、其處で讀書をしたり、手紙を書いたりする。

少し歩かうといふので、また林間から林間へ移つて行く。

途中でパンやら、卵やらを買つたり、手紙を村のポストへ入れたりして、何處といふあてもなく、青い草、緑の林を追うて旅をつゞける。さうく、此のテント旅行には、是非とも犬を同伴する必要がある、彼も家族の一員だから。

こんな風に私の空想は果てしなくつゞく。

日暮近く、私は両手に抱へきれないほど、林間で掘取つた色々の雑草を抱へて、停車場への通りを急ぐ。私の服の上着も、ズボンも、草の匂がぶん／＼してゐる。――緑草心理――

日の光こもりてあつき芝生より羽蟻ひらめきまひのぼりたり (前田夕葵)

四 童 心

北 原 白 秋

聖心せいしんは童の心である。

越後の良寛禪師は、殊に此の童心の持主であつた。かういふ話がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これを禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供達と遊ぶ事が、またどんなに嬉しかつたかが思はれる。

その良寛様も、子供達には随分馬鹿にされて、盛んになぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊んでゐた良寛様がありがたい。或時いつ、例の通り、子供達と隠れんぼをして居られた。鬼にな

北原白秋 名は隆吉、明治十八年福岡縣に生る。文學者。歌人。

良寛禪師 越後國(新潟縣)出雲崎町に生る。歌人。草書を能くした。天保二年(二四九一)歿、年七十五。

つた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ」といふ可愛い聲を一心に待ち受けて居られると、丁度日の暮れ時で、子供心の何
がな欲しくなる時である。家々の燈がちら／＼と點き出すと



子供達は急に遊をやめて、一人残らずこそ／＼と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうちやらかしてある。無論幾ら待つても「もういゝよ」と言ふものは無い。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうして、とう／＼夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に、同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ」と

挿繪 良寛畫像。平福百穂筆。

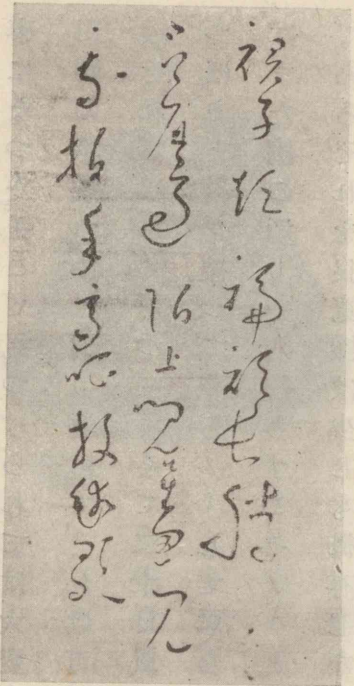
子供が呼ぶのを待つて居られた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ正直さ。

それから、また或時のことである。良寛様が今度は隠れる事になつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中に潜り込んで、それは可愛らしい事だ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに、頭からすつぽりと藁を被つて、おど／＼して居られた。すると子供達は、また例の通り一人残らずこそ／＼と歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じない。また日が暮れて、夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が登りはじめると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻束を矢場にはづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつても

ぐつて居られる。「おや良寛様が。」といふと、慌てて「そつとしろ、そつとしろ。子供が見つける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ、まるで子供である。

又、或日のこと



である。その良寛様が、男の兒や女の兒達とおはじきをして居られた。沙門良寛全傳

に、「禪師頗る大勝を博して、賭物の熬豆を多く得。」と書いてあるから、餘程の乗り氣であつたらしい。丁度その時に誰かが入つて來た。そして「おやく、良寛様なか、あなた様はお

慌つあわつ

挿繪 良寛筆蹟。

禪師短ク襦袢長シ膝々兀々只麼ニ過ゲ陌上ノ兒童忽我ヲ見手ヲ拍チテ齊シク唱フ放球ノ歌

博博

弾きがお上手で。」と褒めると、罪がないこと、良寛様はぼうつと面を赤くなさる。まるで少女のやうにさもく、恥づかしさうに、そつとその熬豆を膝の下におし隠したといふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ恥づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく身を謙る心である。尊い聖心はすべて此の童心を源にする。

禪師が如何に天真爛漫であつたかといふことをもう一つお話する。

或時、赤々と實が熟れて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいと言ふ。「よし、それでほわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。」

恥耻

漫慢

柿柿

と言ひながら、やつとこさと木の上に匍ひあがつた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ。一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛様は夢中になつて、噛るは噛るは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしやむしやと食べてゐる。下にゐる子供こそ哀である。それを見て火のやうに泣き叫ぶと、始めて良寛様も氣がついた。さあ、しまつた。これは、といふので、慌てて枝を揺つたといふ話。思うてもその慌て方のかしさを、罪のなさ、真正直さ、その子供らしさ、全く涙が零れるほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からその儘である。それは何物にも代へ難い、二つとない尊い天

稟つらである。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親から酷く叩かれたので、つい上目をした。そこでまた／＼叩かれた。親を睨むやうな奴は、蝶になるぞ。これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて来ない。さあ家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、或濱邊の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。榮坊どうした。と言ふと、榮坊曰く、「おら、まだ蝶にならないか。」

蝶になると言はれたので、ほんとに蝶になると思つて、一心に海を諦視あきらめて、顛へてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本と言ふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。聖心はこの童心を源とする。

一 (洗心雜話)

五 短歌評釋

若山 牧水

専ら初歩の和歌愛好者のため、和歌評釋の筆を執らうと思ふ。一は廣く和歌といふものを知らしめんため、一は之を詠む人の參考にもならうかと思ひ立つたのである。

石崖に子ども七人腰かけて河豚を釣りやり夕焼

小焼。(北原白秋)

「夕焼小焼」はよく子供達が夕焼のしたときに唄ふ歌である。それを其のまま持つて來てあるのだが、それが如何にもよく調和してゐてわざとらしくない。わざとらしくないのみならず、其の句のあるために、夕焼小焼のした海邊の崖に、

北原白秋 前課參照。

若山牧水 名は繁。宮崎縣の人。早稻田大學英文科出身。歌人。昭和三年歿、年四十四。

多くの子供達が一心に魚に釣り入つてゐる景色がはつきり水の滴るやうに歌ひ出されてある。

青き果の蔭に椅子よせ春の日を友と惜しめば薄雲の行く。(北原白秋)

木立の深い庭園に、青い果實を附けた一もとの樹があつた。其の蔭に椅子を寄せて、親しい友とともに、言葉も少なく暮れ行く春を惜しみ悲しんでゐると、木の間に透いて薄い雲がしら／＼と盡きず盡きず流れてゐる。

あたらしき明日の來るを信ずといふ自分の言葉に嘘は無けれど。(石川啄木) いつまでも／＼斯のやうに不本意な濁り澱んだ苦しい

釣釣釣

石川啄木 名は一。岩手縣の人。歌人。明治四十五年歿、年二十七。

境遇にぼんやり佇んでゐる自分では決してない。生れ代つたやうな新鮮な光り輝いた未來が來るに違ひないと信じてゐる。さういふ自信だけは確に今のやうな自分の身體の裡にも潜んでゐる。が、一體何時になつたら、其の信じてゐる新しい明日の日が來るのであらうといふ、永い間の過去の經驗を振り返つて絶望ともない絶望を歌つたものである。露骨に輕率な叫びを揚げず、悲憤慷慨口調でそれを歌はず、殆ど他を相手にせぬやうな獨りごとでもいふやうな態度のなかに、却つて言ひがたい深刻な苦痛が溢れてゐる。

稀にあるこの平なる心には時計の鳴るも面白く

聴く。(石川啄木)

自分にしては極めて稀な此の靜かな平かな心には、聞馴

潜=潜

れてゐるあの時計の音までが如何にも興味深く聴きなされるといふのである。深い青海の底に、靜かに一匹の魚が尾鰭を収めてじつとじてでもゐるやうな、靜かな懐かしい印象を受けて來る。我等讀者はかうした場合にあつた作者を想像することによつて、おのづとわれと我みづからを懐かしむ心が湧いて來ると思ふ。

—(和歌講話)—

興=キヨツ

收む=をさむ

六新緑

五十嵐 力

自然を見る眼が暗いのであらう。私が新緑の美といふものを心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうになつてからである。冬の中に寒肥かみなどをやつて、花を待ち若芽を待つ、もどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅い白い色々の花が咲く。そしてそれが散ると、今まで堅く結んでゐた葉が段々にほごれて来て、米粒・大豆粒位の小さなポツテの裡から、三寸五寸一尺二尺といふ水々しい若枝が伸び出す。数枚数十枚の透き通るやうな若葉が開けて来る。木によつては尺にも餘る直径の、化けさうな巨大な葉が、丁度手品師が小さい空箱から大きな雨傘を幾つ

五十嵐 力 文學博士。明治七年米澤市に生る。早稲田大學教授。

も出すやうに、幾枚ともなく現れ出でて人を驚かす。

凡そ植物の一年間の生活の中で、新緑の時分ほど、驚異を現すことはあるまい。而して其の驚異が、一々我等が平生の手當心遣りに反應して来る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸の枝の伸びる所にも、限りなき喜びが湧いて来る。彼等の瑞々みぎしい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心である。彼等の新しく生長する姿を見ながら、無駄枝・馬鹿枝を剪み切るのは、子供の身體から疣うぶ・腫物を除き去つてやる心である。柔かな枝の匂ひを妨げる古葉・枯枝を拂つてやるのは、子供の身體から髪を刈り、爪を切り、垢を洗つてやる心である。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひ落し、自然の風姿をほしいまゝにして、吾等を招

及應
内通
（非別）

（ハシ）

くやうに、枝を伸ばし、葉を伸ばすところを眺め、晩春の柔かい日光が透き通るやうな薄緑の葉に濾されて、春温の煙るやうな木の下蔭をそよろあるきする心の喜びは、實に何ともいふことが出来ぬ。

花といへば紅い色を思はせる様に、緑といへば直ぐに青い色を思はせるけれども、「新緑」といふのは、無論新しい木の葉のあらゆる色を含めていふので、緑や青に限つたのではない。「緑の錦」といふのは、この若葉の無数の色を一番力のある緑に統べさせた名前である。

新緑は紅、白、黄、紫など、花の有つて居る無数の色を殆ど悉く備へて居る外に、如何なる花も有つて居らぬ一つの色を有つて居る。「緑」である。「青い色」である。西洋では「青い花」といふ

詞が、世の中に無いものといふ意味に使はれて居るが、緑の色は、實に葉のみの有する特權である。「緑」は、造化が花に禁じて葉にのみ許した貴い色である。花に取つては禁色であり、葉に取つては「ゆるし色」である。あらゆる色を許されて緑のみを許されなかつた花は、いかなる羨みの眼を以て葉を眺めて來たであらう。貧しいながら凡ての色を許された上に禁色の緑を豊かに許された葉は、如何なる誇りを以て花に臨んで來たであらう。櫻が散つてから栗の花の鬱陶しく香ふまでの五十日は、花に色の數々を盡くさした上に、許しの一色を誇るための葉の季節ではなからうか。植物學者は花は葉の變形だと説いて居るが、さすれば葉といふ親が、自分に存在の意味を留めるために、此の一色を美しい子に惜し

禁色 キンジキ。衣服の染色。深紅・深紫等の如く常人には禁止された色。
ゆるし色 紅色・紫色等の薄くして、常人にも許された染色。

んだのではなからうか。

我等は無盡藏なる水や空気を貴ばぬやうに、多きに馴れて緑の葉を貴ばぬやうになつて居るが、緑の色ほど人に好い感じを與へるものはない。そして其の緑の色の生粹を現したものが新緑である。新緑は、人間が緑の色に馴れて之を軽んじようとする心を驚かして、其の絶大の價値を覺らしめようとする自然の示威運動である。

家にのみ籠つて居て、殆ど旅行といふものをしたことのない私は、まだ大山・大河・大平野などに於ける大舞臺の新緑の美に打たれたことがない。たゞさういふ景色で平生あこがれて居るのは、嵐山の新緑である。私は數年前、四月はじめの櫻の盛りに嵐山に遊んだことがあるが、あの櫻・楓が常磐

生粹きつする。まじりけのないこと。純粹。

Demonstration

嵐山 京都市右京區にある櫻・紅葉の名所。

木の間、に織込まれ、長い枝を川の上に伸ばして、澄んだ淵に全き影を映し、淺瀬の白波に、青い影を碎かせて、渡月橋の上十町を装つた景色が、どんなだらうと思ふと、そゞろに胸の躍るのを覺えて來る。

新緑は私に取つて、實に花にもまさる喜びである。野山の大きな景色は云ふに及ばず、猫の額のやうな小さい庭の新緑でも、なほ自分の小さい心に盛り切れぬ喜びと感謝とを湛へてくれる。

―野草集―

五月某日、五時少し前に起きた。大地は露にしめり、霞に護られて、一塵もあげずに朝日の昇るのを待つて居る。私は高い山も大きな河もない、しかも都に近い平野にこんな美しい景色があるかと驚いた。(五十嵐カ)

渡月橋 嵐山の麓。大堰川に架する。

七十二挺の鎌

鳥野 幸次

學習院の總寮部に二挺の鎌あり。短きは三尺、長きは一間ばかりもあらん、共に鐵の刃に櫛の柄をすげたり、身の減り、柄の黒みたるは、年久しく使ひ慣らされたりと覺しく、近く手に取るに土の香草の匂さへ、さながら残るやうなるは、見る人の心からなるべし。これぞ此の一室に起臥せられし乃木大將の形見にして、今も尙儼然として大將が在りし世の面影を語るなり。

寄宿寮にての起床時限は五時半なれども、大將は、毎朝定りて四時半には起き出で、朝食までの二時間餘を或は讀書に或は逍遙に過されしが、夏草繁き頃ともなれば、いつも半

鳥野幸次 明治六年福井市に生る。前學習院教授。國學院大學教授。宮内省御歌所寄人。學習院 東京市豊島區目白町。

乃木大將 陸軍大將伯爵乃木希典。明治四十年一月以後、學習院々長の職にあること前後五箇年。大正元年薨、年六十四。

逍遙—セウニウ

攜—携



長靴を穿ち、この鎌携へて、露深き叢に雜草を刈るを一行事とはせられけり。さるからに、我等の洗面などに立ち出づる折節、ふと、其の御姿を見出でては、そらに滿洲の野に旅順

の塞に、三軍を叱咤せられし當時の倂を回想して、一種の靈氣に打たるるが常なりき。

明治四十二年五月の初つ方、我が家に病人ありて、朝疾く寮より家に向復せしことあり。をりしも大將は二挺の鎌もて寮側の草を刈り居られたれば、如何にかすべきと余はしばし心にた

挿繪 學習院長當時の乃木將軍。

刈—刈

ゆたひしが、徒に過ぎんも流石にて、近づき會釋しつ、御手傳をといへば、一挺の鎌を貸されたり。乃ち相並びて刈り居る程に他の職員も洗面に來かゝりて會釋しけるに、大將は莞爾として、通りがかりの職人を雇へり。といはれし、その態度の自然にして、温雅なる、われ人ともに、覺えず此の大人格に包まれて、聲に出でてもうち笑ひき。我がかゝる折の御手助はこの一回なりしかども、その印象は深く心に刻まれて、その日の雲の色、風の音までも、今に忘るゝことなし。

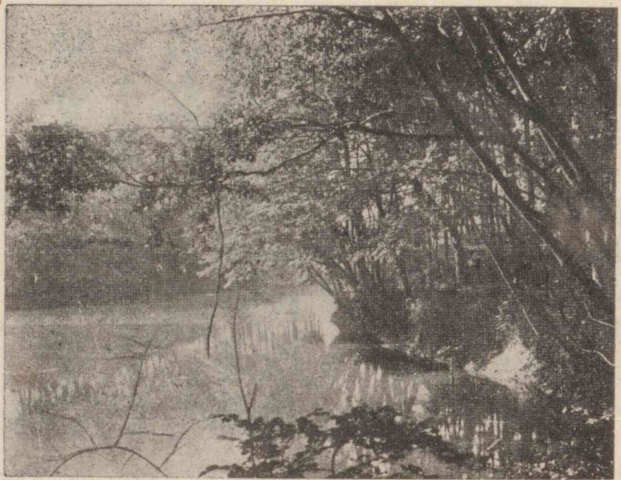
院内に二つの池あり。此處には、人の贈れる鯉を自ら持ち行き、て放たれしことあり。水鳥遊び蓮葦など生ひて、四季の眺の面白ければ、大將も常に行きては心を慰められけるが、この長き鎌は、此處に浮藻を刈り、流葦を引き取らるゝ方の

並並

温雅
温温
品

回回

用なりしなり。ある大雨の朝、まだほの暗きに、大將の此の鎌



もて獨語しつゝ、林間より出て來らるゝに、或る職員の出であひて、何事ならんと怪み問へば、昨夜の大雨に、樋の口切れて鯉の逃げもやせると、見に行かれての歸途なりきとか。こはこれ此の頃聞き得し話なり。

大方は根より抜きては取り棄てられけり。去年の五月晴に、

又大將は姫紫苑をいたく惡み、こは刈るにもえ飽かて、

挿繪 學習院の池。

姫紫苑



余は同僚と碁を圍まんとて娛樂室の方に赴きしが、恰も大

學習院學則之事

崇皇國之懿風

履聖人之至道

不讀聖經何以修身

明辨之

務行之

明治己酉正月

源朝臣希典敬書

もとはわが國には無かりしを、いづれの程よりか舶來して、
今は全國に傳播し、その猛惡の性を恣にすとか。大將の惡ま

將のこれを兩手に束ねて持ち來らるゝに會ひ、心はづかしく感ぜし事あり。この草は一名を荒地野菊といひ、如何なる荒地にも生ふると共に如何なる沃土をも必ず荒地にするが上に、一種の臭氣さへありて、馬も食はねば牧童も刈り残すといふ、世に忌はしき草なりけり。その

荒地野菊 此の草は明治維新の頃から蔓つたと。故に又「御雜新草」ともいふ。
挿繪 乃木院長筆蹟（學習院學則）。

れしも故ありと謂ふべし。

嗚呼、今や大將は去りて、鎌のみ空しく残り。是より後の雜草と荒地野菊とは益、其の威を振ふことなきか。我等は力めて大將の志を繼がんと欲す。かの地に生ふる雜草と荒地野菊とはさてもありぬべし。人中の雜草と荒地野菊とは遂に恕すべからず。是大將が日夕最も憂慮せられし所にして、又我等が一層の鋭刃を振はざるべからざる所にあらずや。大將が自らなる趣味とも見えし無意の行動が、今日圖らずかゝる教訓を齎せるも、その人格に因せる自然の暗示としもいふべきか。

（嗚鳴）

刃二双

（彩雲）

八松坂の一夜

佐佐木信綱

佐佐木信綱 第一課註参照

時は夏の半さいいとこせ」と長閑やかに唄ひ連れゆく御伊勢参りの群も、春先ほどには騒がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本の老舗、文海堂柏屋兵助の店先に、

「御免。」

といつて腰をかけたのは、本居舜庵といふ魚町の年の若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名を宣長といつて皇國學みくにがくの書やら漢籍やらを常に買ふ此の店の花客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて、

「あゝ残念なことをしなされた。あなたがよく名前を言つておいでになる江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子と供

松坂 三重縣(伊勢國)松坂市。
騒さわぐさわわぐ

本居舜庵 宣長のこと。松坂に生る。賀茂眞淵の門に入り、國學四大人の一人に仰がれる。享和元年(二四六一)歿、年七十二。

一藉籍

岡部先生 賀茂眞淵。通稱岡部衛士。荷田春滿の門人。國學四大人の一人。明和六年(二四二九)歿、年七十三。

を連れてお立寄になつたに。」

と言ふ。舜庵はいつものゆつくりした調子とは違つて、

「先生がどうして此處へ。」

と、あわたたしく問ふ。

主人は、

「何でも田安様の御用で山城から大和とお廻りになつて歸りに參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋しんじやうやへお着きになつたところ、少しお足に浮腫うづみが出たとやらで御逗留、今朝はもうお宜しいとのこと、御出立の途中を、何か古い本は無いかと暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。」

舜庵

田安様 田安宗武。將軍吉宗の第二子。眞淵の門人。明和八年(二四三二)歿、年五十七。

「それは残念なことである、どうかしてお目にかゝりたいが。」

「跡を追うてお出でなされませ、追ひ付けませう。」

と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聞き取つて、跡を追うた。



湊町・平生町・愛宕町を通り過ぎ、松坂の市街を離れて次の宿なる垣鼻村のさきまで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すこす

ごと我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂の本陣新上屋に

挿繪 賀茂眞淵肖像。

垣鼻村 現在の松坂市の南部。

二見浦 三重縣(伊勢國)度會郡二見町の海岸。
鳥羽 三重縣(志摩國)志摩郡の町。その西北の小丘が日和見山。

宿つた。もし歸りにまた泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子村田春郷は二十五、其の弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室に寛いでゐた。衛士は仄暗い行燈の下に舜庵を引見した。賀茂縣主眞淵通稱岡部衛士は當年六十七歳、其の大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、其の名噴々たる一世の老大家である。

年老いたれど頼豊かなる此の老學者に相對して本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年。しかも彼は二十三歳にして京都に遊學

村田春郷 眞淵の門人。江戸の人。歌人。明和五年(二四二八)歿、年三十。
村田春海 春郷の弟。眞淵の門人。國學者。文化八年(二四七一)歿、年六十六。
冠辭考 十卷。冠辭をまとめて五十音順に配列註解した。
萬葉考 六卷。萬葉集考のこと。萬葉集の註釋書。
有徳公 八代將軍徳川吉宗一卿

して醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫業を學んだのみでなく契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んでかねて志してゐる古事記の註釋に就いて、其の計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇に其の意見を語つた。

「我も固より神典を解きあきらめんの志はあつたが、それにはまづ漢意を清く離れて古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言葉を得た上でなければならぬ。それには萬葉をよく明めねばならぬ。それ故自分は専ら萬葉を明めて居た間にかくも年老いて殘の齡幾ばくも無く

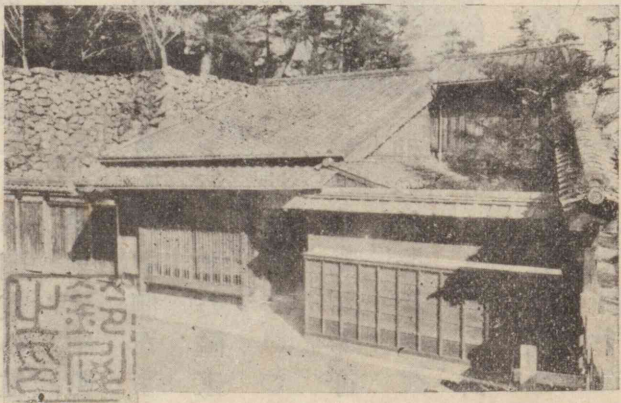
契沖 圓珠庵契沖。眞言宗の僧。大阪に住む。國學者。元祿十四年（二三六一）歿、年六十二。

古事記 三卷。神代より推古天皇の朝までの事を記す。元明天皇の朝に、太安麻呂の記したもの。

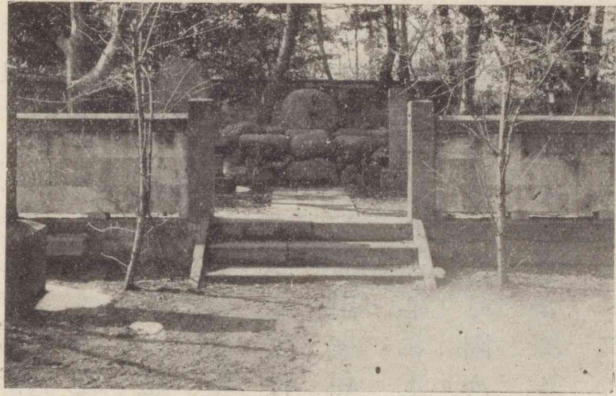
萬葉 萬葉集。二十卷。仁徳天皇の朝より奈良朝までの長・短歌を集めたもの。

なつてしまつた。御身は年盛りで、ゆくさまが長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成しとげられるであらう。しかし世の學に志す者は、とかく低いところを經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬのである。此の旨を忘れず心にしめてまづ低いところをよく固めて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜はまだきに更けやすく家々の門の皆とざし果て



挿繪 宣長の舊宅。



た深夜に、老學者の言に感激して面ほでりした若人は、さら
でも今朝から曇り日の闇夜の道
の、いづこを踏むとも覺えず、中町
の通を西に折れ、魚町の東側なる
我が家の潜り戸を這入つた。隣家
なる桶利の主人は律義者で、いつ
も遅くまで夜なべをして居る。今
夜もとん／＼と桶の縮をいれて
ゐる。時にはかしましいと思ふ折
もあるが今夜の彼が耳には何の
音も響かなかつた。

舜庵は其の後江戸に便を求め、翌十四年の正月村田傳藏

挿繪 眞淵の墓（東京市品川區 東海寺内）。

翌十四年 寶曆十四年。村田傳藏 坂大學（眞淵の門人）の通稱。

が中にはひつて名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の
門人録に名を列ねる一人となつた。その誓詞の要旨は、平素
熱望してゐた賀茂翁の皇道講究の門に入るを得た喜びを



他人に洩らすまじきこと、また、師翁に對しては如何なる事
情あるも絶對に非禮不遜の念を懷くまじきことを、天地神
明に誓ひ奉つたのである。爾來松坂と江戸との間、飛脚の往

述べ、なほ、

示教の奥

義を體得

した曉と

雖も、斷じ

てこれを

棒棒

うけひごと（誓詞）

挿繪 本居宣長肖像。

來に彼は問ひこれは答へた。門人とはいへ、其の相會うたことは僅か一度、たゞ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯南郡松坂日野町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若人とを照らした。しかも其の仄暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。

—(賀茂真淵と本居宣長)—

寶曆十三年 後櫻町天皇の御代(二四二三)。

九 蓮

豊島 與志 雄

私は蓮が好きである。泥池の中から眞直に一莖を伸ばして、その頂に一つ、葉や花や實をつける、あの獨特な風情もよい。また單に花からばかりではなく、葉や實や根などからまでも、仄かに漂ひ出してくる、あの清い素純な香もよい。その形、その香、そして泥土と水、凡てに原始的な幽玄な趣がある。田舎の子供達は、眞白な蓮の根をぼきりと折つて、中に通つてゐる八つの穴に何がはひつてゐるか、と好奇の眼を見張りながら、いつまでも、じいつと覗き込む。または葉の莖を折取つて、それを更に幾つにも小さく折つて、折られた莖が細い糸でつながつてゆくのを、面白さうにぶら下げて眺め

豊島與志雄 文學者。明治二十三年福岡縣に生る。東京帝國大學文學部講師。

幽玄 奥ゆかしい。

る。それにも倦きると、小川の清い水を葉の中にすくひ込み、
鮒や鯰の子を捕へて来て、その中に泳がせて楽しむ。或はま
た大きな花を折取つて来て、その眞白な花瓣を一つ一つむ
しり取り、黄色い雄蕊、雌蕊を中に乗せ、實を積んだ舟として、
橋の上から川の眞中に、幾つもの流し浮かべる。

蓮の葉や花が孟蘭盆の佛壇につきまものとなつてゐるの
は、佛教の廣まつてゐる地方共通の周知の事柄であるが、あ
る地方では、孟蘭盆の前、七月七日の七夕祭が、可なり盛に行
はれる。七八歳の子供達は、七夕に關係のある俳句や和歌や
漢詩の類を、前々から習字しておいて、それを七夕の日の朝、
普通の軸物くらゐの大きさに清書し、床の間に掛けて、いろ
んな果物や野菜の類を供へる。その後で、女の子は色紙で小

孟蘭盆 ウラボン。孟蘭盆
會(エ)の略。生靈祭。お
盆。

七夕祭 たなばたまつり。
御機祭とも書く。七夕に
織女といふ星を祭る故の
名。

さな衣服を裁ち、男の子は色紙の短冊に勝手な文字を書き
ちらし、それを青笹の枝に吊して、縁先の庭に立てる。そして、
それらの文字を書いたために用ゐられる硯の水は、蓮の葉に
溜つた露の雫を最もよしとしてある。子供達は早朝から起
上つて、夜のうちに蓮の葉に溜つてゐる水銀のやうにとろ
りとした清い露の雫を、いそぐとして集めに出かける。

さういふ話を、一昨々年の夏、私はある友人に向つてした。
すると十日ばかりたつて、美事な紅蓮の一鉢を植木屋から
届けて来た。友人の名刺が附いてゐた。私の手蹟が餘り拙劣
なので、蓮の葉の露を取つて習字でもせよといふ謎かも知
れないが、併し私には非常に嬉しかつた。庭の眞中に据ゑさ
せて、仕事に疲れた眼を慰めた。徑一尺餘の小さな鉢だつた

が五六枚の葉をつけ、花を二つ持つてゐた。鉢の中の藻の間に絲蚯蚓が澤山ゐたので、それを食ひ盡くさせるために、緋目高を四五匹放つたりした。

そのうちに、淡紅色の花弁が散つて行き、葉も一二枚黒ずんで枯れていつた。花の後の漏斗形の萼は、實を結ぶ様子もなく、小さく萎びて立枯れてしまつた。残りの葉も亦、霜を受けない先に枯れかゝつた。鉢の中を覗いてみると、彎曲したこち／＼の根が、土の中に痛ましく露出してゐた。恐らく蓮は徑一尺餘の小さな鉢の中で、充分に伸びようとして伸びることが出来ず、窮屈の餘りに窒息しかけたのであらう。さう思ふと、吾が愛する此の蓮のために、充分の泥と水とを與へてやりたくなつた。

私は近くの瀬戸物屋へ出かけていつて、其處にある一番大きな蓮鉢を買求めた。徑三尺ばかりの分厚なもので、田舎の廣々とした蓮田には及びもつかないが、一二株の蓮の生長には充分らしかつた。私はそれを日當りのよい所に据ゑて、庭の隅から掘起した土を盛り、それを水にこねて、蓮を移し植ゑようとした。そこへ叔父がひよつこりやつて來た。漢籍や盆栽に親しんで日を送つてゐる叔父は、私の柄にもない仕事を見て、長い髻を撫でながら笑ひ出した。そしてこんなことを云つた。

——蓮は秋に動かすものではない。春の彼岸頃、舊根が腐つて新芽が出だしたのを、逆様に移し植ゑるのを以て法とする。併し、凡そ花卉のうちでも、水ものは最も栽培困難とし

てある。素人の育て方で、蓮の花を一つでも咲かせ得たら、それこそ園藝の天才である。

私はその天才にならうと欲した。そして叔父の意見を参考にして、蓮を移し植ゑるのを翌年の春まで延ばした。すると圖らずも意外な便宜を得た。

私の家へ、田舎から時々野菜物なんかを持つて来てくれる農家の老人があつた。その老人が、蓮を育てたいといふ私の志望を聞いて、蓮には都會のこんな瘦せた土では駄目だから、上等の肥えた土を進上しよう、といふ好意を寄せてくれた。やがてその老人が、車に積んで運んで来てくれた土は、荒川岸の泥土とかで、壁土に用ゐても最上等なもので、色は少し灰色がかつて、ねつとりとした重みのある濃密なもの

だつた。

私はそれに力を得た。春の彼岸になるのを待つて、小さな蓮鉢をひつくり返してみると、底の方にか細い白根が腐らずに残つてゐた。でも、それだけでは大きな鉢には足りないやうな氣がした。で、更に植木屋から、白蓮と紅蓮との苗根を一株づつ取寄せ、その上田舎の老人に頼んで、普通の食用蓮の苗根をも取寄せ、それらを逆様に鉢の中へ植込んだ。そして植木屋から聞き知つた肥料として、大豆と乾鰯とを與へた。

所が、春がたけていつても、蓮の芽はなか／＼出なかつた。其の伏りに、鉢一面にぎら／＼とした油が浮き、青褐色の苔が泥の面に擴つていつた。そして六月の始め頃になつて、小

さな蓮の芽が出だしたけれど、その巻葉が開きかけると、しなくと横に倒れて、四五寸くらゐの大きさにしかならず、それもやがて縁の方から枯れていつた。そしてたゞ油と水苔とだけが鉢の中一杯に漂ひ浮かび、泥の中からは泡が立ち、物の腐爛した臭氣が發散して、清淨な蓮の花も匂もその氣配だに見せないで、いぢけた小さな五六枚の葉だけが、枯れ残つてゐるのみだつた。はじめ私は蓮を盛に太らせるために、大豆を一合ばかりと乾鰯を七八本やつたのであるが、それが餘りに多過ぎて、蓮は肥料負けしてしまつたのである。私は悲しい氣持で、ほんやり蓮鉢を見守るの外はなかつた。たゞ一つ私の心を慰めたことは、孟蘭盆の折、亡父と亡兒との位牌のある佛壇に、その蓮の葉を一枚供へることが出

氣配一キハイ

來たことである。

それだけのことを唯一の收穫にして、私はいつしか蓮鉢を忘れがちになつた。年を越して昨年の春、鉢の泥を半ば取換へてやらうかとも思つたが、それもつい不精から時期を過して了つた。そして暖かくなるにつれて、鉢の中は油ぎつてねちちとして來たが、それと共に一つ二つ蓮の巻葉が出だして來た。強すぎる肥料のしみた泥土の中にも、根だけは生き残つてゐたものと見える。伸び出した葉は、前年と同じやうに、小さないぢけたものだつたが、それだけにまた可憐でもあつた。私はもう、花は勿論大きな葉をも期待せず、その小さな葉だけで満足した。

七月の末から房州の外海岸へ行つて、一夏を其處で過し



た。盛に繁茂してゐる蓮田を見ると、自分の貧弱な蓮鉢が思ひ出された。そして九月のはじめ家に歸つて来て、私は少なからず驚かされた。いつの間にか、庭の蓮鉢から相當に大きな葉が七八本も眞直に伸び出してゐた。たゞ悲しいことに、蓮の葉の裏面や柄に、油蟲が澤山群つてゐた。鉢の上の方に桃の一枝がさし出てゐて、それから傳播したものらしい。私は惜し氣もなくその桃の枝を切りさつて、それを鑿殺してやつた。

挿繪 蓮田。

蓮の葉は勢を得たやうに、青々と茂つていつた。もう餘分の肥料も泥土に吸ひつくされたらしく、水がさつぱりと澄んで、青い藻まで生えてゐて、蓮特有の匂も氣のせむばかりでなく、實際に感ぜられた。それから霜時になると、枯蓮の趣も充分に見られた。

そして冬を越して、今年の春である。

今日彼岸の日に藁の覆ひを取去つてみると、鉢の泥は肥えて黒ずみ、水は冷たく澄みかへり、所々に枯葉の柄が残つてゐる。今に其處から青々とした卷葉が伸び出し、それが圓く大きく擴つて、露の雫を宿すころには、更に花の蕾が伸び出して来て、夜明けの光に音を立てて、ぱつと開くであらうなどと想像すると、私は蓮の臺うたいに坐するやうな清淨な心境

を覺えた。
それにしても、鉢の中に生き残つてゐるのは、紅蓮であらうか、白蓮であらうか、または普通の食用蓮であらうか。或はその三つ共であらうか。それはこの夏、花の開く折の樂みとして、私はうららかな春日のさす縁側に蹲つて、庭の蓮の鉢の方へ眼をやつて居る。

（隨筆）

一〇 三人一兩損

大町 桂月

江戸の靈岸島長崎町に疊屋三郎兵衛といふものありき。正直者のぶつきら坊にて、お世辭は微塵もなし。贅澤するでなく、道樂するでもなければ、師走に押しつまつて、どうしても無くてはならぬ金三兩、和泉橋邊の出入場にゆき、頼むより早く、いさぎよく貸してくれたるも、正直の餘德、これで年が越されると安心して歸り來り、懷をさぐるに入れた筈の金なし。袂をふつて見ても無し。さては、路におとしたるに相違なし。折角借りた金をおとすといふは、よくよく、金に運の拙き者なり。この上は唯一所懸命に働くの外なしと、江戸兒の本性、思ひ切り善く、愚痴をこぼさず、悔んでかへらぬ事を

大町桂月 名は芳衛。高知市の人。文學者。大正十四年歿、年五十七。

兩一兩

和泉橋 東京市神田區。神田川に架す。

慶長金
元銀
寶永
享保
萬延

悔みもせず、平生よりも一層勇氣を出して、せつせとかせぎたり。

小傳馬町に建具屋長十郎といふ者ありき。三味線堀へ用たしに行き、柳原の土手下にて、ふと紙に包みたるもの落ちたるを見る。とりあげて其の中をしらぶるに三兩あり。落し主は、さぞや困り居るならん。送りとゞけずには居られずと決心しぬ。それも金を白紙につゝみたるならば、落し主をさがす手掛りもなけれど、幸にも三郎兵衛は他より貰ひたる手紙につゝみたり。手紙の宛名は壘屋三郎兵衛、落し主の職業と名とは知れたるなり。今は聖代の有難さ、拾ひものすれば、警察に届けざるべからず。一年にして落し主出でずんば、拾ひたる人の所得に歸す。落し主出づるも、凡そ五分の禮

小傳馬町 東京市日本橋區
三味線堀 淺草區小島町と
下谷區竹町との間にあつた舊地名。
柳原の土手 神田區神田川岸の土手。
堀

をすることに定まり居れど、徳川時代には、そのやうな簡便法は無かりしにや、殊勝なる哉。長十郎三兩の金の落し主をさがさんとて、草鞋を穿き、腰に辨當つけ、さらでだに忙しき節季師走、我が身に職業あれど、人の難を黙視して居られず。壘屋三郎兵衛といふ人は居らぬか、もしも落し物はせぬかと、江戸の八百八町を片つばしより尋ね歩く。

一日又一日、四五日は空しく過ぎぬ。たま／＼壘屋三郎兵衛といふ者あるかと思へば、落しものはせぬといふに、さては落し主にあらざるかと、尋ねに尋ね、さがしに探して、終に靈岸島長崎町の壘屋三郎兵衛を探しあてたり。落し物はせぬか。と問へば、主人は暫し考ふる様子なりしが、女房娘が差し出でて、先日金を落した事を忘れられしか。其の金高は三

業一ゲツ

老一出下
出ーヤルマ

兩疊屋三郎兵衛といふ宛名のある手紙に包んであつた筈。と。證據は十分なり、受取られよ。とて金を出すに、三郎兵衛は承知せず、金を落すといふは金に運のなきものなり。拾はれたるそなたは、金の果報者、天が授けたるなり。その金はそなたの金なり、我が金にあらず。殊に數日間も探し廻られたりと聞きては、甚だ以てお氣の毒なり。そなたが持ちて歸られよ。といふ。いや、拾ひたる金をとるやうならば、このやうに辛苦して探すことはせざるべし。我が心づくしを察して、其の金は納められよ。といなむ。いや、受取らぬ。いや、持ちかへられよ。と。果てしなれば、長十郎は金を投げ出して立ち出でんとす。三郎兵衛飛び出して長十郎の襟を掴み、この無禮者と鐵拳を揮ふ。この馬鹿野郎と打ちかへす。氣早き江戸

果一クワ

江戸見
江古五ん天

一怒

兒肌の職人同士、正直だけに激怒し易く、始の好意は何處へやら、仇にでもめぐり逢ひたらんが如き大立ち廻り、喧嘩だ喧嘩だと行人が立ちどまる。家主が出て来る。名主までも引張り出されて、やつと二人を引きわけたれど、始末のつかぬは金三兩なり。止むを得ず、明判官の聞え高き大岡越前守に訴へ出でたり。

越前守は二人の言ふ所を聞きて、今の世の中にもかゝる正直者があるかと感嘆に堪へず、追つて沙汰するとて、其の日は其の儘歸らしめ、數日経て再び呼び出す。白洲には竊盜強盜詐欺などの罪人多く居並べり。越前守判決を下して曰く、二人の金を譲りあふ事は當代の美談なり。三兩の金は官に納め置き、改めて官より金四兩を下し遣はさる。之を二人

大岡越前守 名は忠相。江戸町奉行。後に三河國一萬石を領した。寶曆三年(二四一三)歿、年七十。

他所所有する財物
とる。こと、

多行、或はけり
其の、午後後
かへ他人、財物

にて等分せよ。」と二人問うて曰く「もとの金は三兩なり。之を等分すれば一兩半となるべきに、二兩づつ分かつては如何なる事にや。」と。越前守答へて曰く「三郎兵衛は三兩落して二兩とる。一兩の損なり。長十郎は三兩拾ひて二兩とる。一兩の損なり。我も餘りの殊勝さに一兩損をして兩人につかはすものなり。」兩人納得して退く。三人一兩損の裁判とて世に名高くなりぬ。

三郎兵衛と長十郎とは意氣相投じて、極めて親しく交るやうになれりとぞ。

（新學生訓）

一、雲龍の圖

薄田 泣 董

探幽は名畫家の多い狩野家でも、とりわけ畫才が勝れてゐるので聞えてゐた人でした。

この探幽が或時、松平伊豆守信綱に招かれて、その屋敷に遊んだことがありました。主人の信綱はその日の記念として、雲龍の圖を探幽に求めました。

雲龍の圖だといふので、墨汁は家來たちの手でたつぷりと用意されました。探幽は畫絹を前に、しばらく構圖の工夫に思ひ耽つてみました。が、やがて考へが決つたと見えて、筆をとり上げようとしますと、そこへ次の間から信綱が興奮したらしい顔を現しました。そしてまだ何一つ描き下ろし

薄田泣董 名は淳介。明治十年岡山縣に生る。詩人。大阪毎日新聞社囑託。

探幽 狩野氏。名は守信。狩野派の畫家。延寶二年（一三三三）歿、年七十三。

松平伊豆守信綱 武藏國川越の城主。寛文二年（一三二二）歿、年六十七。世に智慧伊豆と云ふ。

汁一ジフ

畫一畫

一、雲龍の圖

てない畫絹を見ると、

「何ぢや、まだ一つも畫いてないのか。さて、繪師といふものは鈍なものぢやて。」



まで飛び散りました。まるで氣の狂つた泥鼠が亂暴を働いた後のやうでした。探幽はむつとしました。

わざと聞えよがしに言つた

かと、思ふといきなり足の爪先

でそこにあつた硯を蹴飛ばし

て、そのまゝ、次の間に姿を隠し

ました。墨汁は畫絹は言ふに及

ばず、探幽の膝から胸のあたり

まで飛び散りました。まるで氣の狂つた泥鼠が亂暴を働いた後のやうでした。

亂暴

一爪

挿繪 探幽畫像。

「あまりといへば亂暴ななされ方だ。」

眞青に顔の色を變へて、そのまゝ立ち上つて歸らうとしました。それを見た松平家の家來たちは、てんでに言葉をつくして平謝りに謝りました。このまゝ、探幽を歸しては、届合はず家來たちの大きな手落ちとなると聞いては、探幽もむげに我を通すわけには行きませんでした。彼はしぶく座に歸つて、また畫絹の前に坐りました。

伊豆守の無禮だけはどうしても見逃すわけには往かぬ

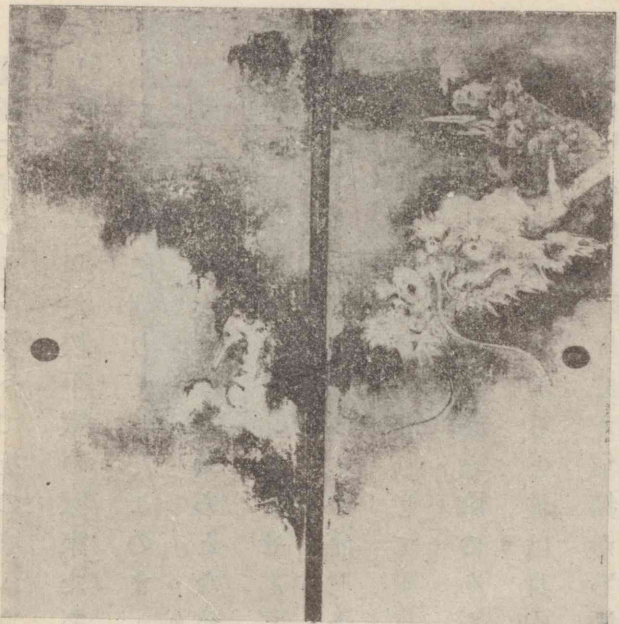
と探幽は思ひました。膝から胸のあたりに飛び散つたなま

なましい墨汁の痕を見ると、彼は身内が燃えるやうに覺え

ました。このいら／＼した氣持から遁れるには、湧き返る憤

怒をそのまゝ、畫絹へ投げつけるよりほかはありませんで

憤り
（いきどほり）



と微笑しました

した。探幽は頭へる手に繪筆を取り上げて、畫絹と摺み合ふやうな意氣込で雲龍の圖にとりかゝりました。

程なく畫は描き上げられました。それはすばらしい出来でした。探幽はそれを見て憤怒のまだ消え切らない口もとをへし曲げるやうにして、ちら

挿繪 探幽筆雲龍圖。

笑一セツ

先刻から探幽のおそろしい筆づかひを見て、どうなることかと氣遣つてゐたらしい松平家の家來たちは、お互に顔を見合はせて腹の底から感心したらしい溜息を洩らしました。

そこへ主人の信綱が、以前と打つて變つて慇懃なもので、にこ／＼しながら出て來ました。

「先刻はいかい失禮をいたしました。氣持に感激がないといゝ繪は出來難いものぢやと聞いたので、ついその……。」

探幽は始めて信綱が自分に無禮を働いたわけに氣がつきました。それと同時に、智慧自慢の伊豆守がこの畫の前に立つて誰彼の容赦なく、作者を怒らせて描かせた趣向を語つて聞かせるだらう、その得意らしい顔つきが氣になつて

イシケン
イシケン
イシケン

かんかへ
描く一ゑがく

なりませんでした。で、負けぬ氣になつて次のやうに言ひました。
素人の人巨存
「素人衆は一途に感激のことを申されますが、畫家にとつて大切なのは感激よりもその感激に手綱をつけて引き締めて往く力でございます。この繪も引き締めるのに大分骨が折れましたが、まあ、どうかかうか……。」
一 艸木虫魚

一住

新井白石
折上人集
博覽強記
同文通考
新史餘論
本朝軍考
天覽
白石全集

二三 板倉重宗

新井 白石

板倉周防守重宗は勝重が嫡男なり。元和六年、三十六歳にて父の薦に依つて京職に補せられ、職に在りしこと凡そ三十餘年、人の敬ふこと神明の如く、慕ふこと亦父母に似たり。父も子も同じ名臣にて、君の寵恩最も厚かりけり。
この人の職に在りし時の名譽、天下の稱する所勝げて數ふべからず。職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にて遙に拜することありて、然る後に出づ。決斷所には、茶磨一つを据ゑ置き、明障子を引き立てて、その内に坐し、手づから茶碾きながら、訴を聴き分く。人皆このことどもを不審しあへり。されども問ふこともえならず。はるか年經て後

新井白石 名は君美。江戸の人。儒者。徳川家宣。家繼二代に仕へた政治家。享保十年(二三八五)歿、年六十九。
勝重 徳川家の重臣。三河(四)歿、年八十。
元和六年、後水尾天皇の御代。(二二八〇)
京職 京都所司代。
寵一チヨウ

据ゑ

徳川家宣
所司代

茶磨
丁

問ふ人ありしに、答へて曰く、「まづ、決斷所に出づる時に西面の廊下に拜することは、愛宕の神を拜するなり、多くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなり」と聞きつるからに、所願ありてかくは拜しぬ。その所願といふは、「今日、重宗が訴を斷らむに、心に及ばむ程は私の事あらじ。若し過ちて私の事あらむには、立ちどころに命を召され候へ。年頃深く頼み參らする上は、少しも私心あらむには、世に長らへさせ給ふな。」と日毎に祈誓するにて候ふ。又、訴を判つことの明かならぬは、我が心の事に觸れて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は自ら動かさざらむやうこそあらめど、重宗それまでのことは叶ひ難し。只我が心の動くと靜かなるとを試みるには、茶を碾きて知る。心定まりて靜かなる時は、手もそれに應じて磨

愛宕の神 山城國(京都府)葛野郡愛宕山上の愛宕神社。祭神は火之夜藝速男之神(火の神)。斷る—ことわる

あつた
ひきつる

の廻ること平らかにして、軋られて落つる所の茶いかにも細かなり。茶の細かに落つる時に在りて我が心も動かぬを知り、その後漸くに訴を判つ。又、明障子を隔てて訴を聴くことは、凡そ人の面貌を打ち見るに、憎さげなると憐ましきとあり。また、かだましきあり。その品多くして、いくらといふ數を知らず。見る所の誠しと思ふ人のいふことは誠と聞かれ、かたましと見ゆる人の爲すことは何にても皆偽と見ゆ。又、憐ましき人の訴は枉げられたる所あるよと思はれ、憎さげなる人の争は僻事ならむと覺ゆ。これらの類は、我が目に見る所に心のうつされて、彼が未だ言を出さぬに、はや我が心のうちに、邪ならむ、正しからむ、曲ならむ、直ならむと思ひ定むるほどに、訴の言を聴くに至りては、我が思ふ方にその事

廻り廻

を聴きなすこと多し。訴の成るに及びては、あはれがましきに憎むべきあり、憎さげなるにあはれなるあり、誠しきに偽なる類殊に多し。人の心の知り難き、容を以て定めむこと叶ふべからず。古の訴を聴くには、色を以て聴くことあり。それは覆はるゝ所なき人の事なるべし、重宗が如きは見る所について心覆はるゝこと多し。又さなきだに訴の庭に出でむには恐ろしかるべきに、まして、生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせくて、おのづから言ふべきこともえ言はで、罪にも科にも遭ふ人あらむと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬには若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候ふ。と答へけりとぞ。

聞て、京後、延享二年、(藩翰譜)一
今、餘、羊、向、百、三、十、七、冊、考、
諸、侯、の、傳、記、百、三、十、七、冊、考、

一三 清正と茶道

中村 秋 香

豊太閤晩年茶道を好み、屢、諸將を會して茶式を演ず。加藤清正これを憂ひ、茶道はもと逸人隠士僅に其の日を消する



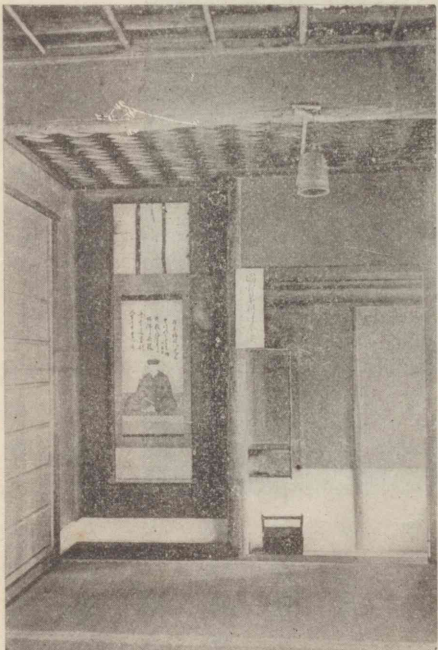
が爲の末技にて、武事に益なきのみならず、文弱に流るるの害あり。國家を治むる者の修すべき道に「あらず」とて、諫を入ること再三に及びしかども、太閤用ゐざりければ、此の上は利休を殺して禍本を斷つの外なしと決心し、詐りて利休の門に入り、茶技を學ばんことを乞ふ。利休喜びて諾

中村秋香 不盡酒舎と號した。舊静岡藩士。國學者。宮内省御歌所寄人。明治四十三年歿、年七十。加藤清正 清忠の子。少時から秀吉に従うて戦功があつた。海内平靜の後、肥後守に任ぜられた。慶長十六年(二二七一)歿、年五十。

挿繪 清正畫像。

利休 千宗易。利休はその號。和泉國堺の茶人。天正十九年(二二五二)、秀吉の怒に觸れて自刃した。時に年七十一。

し、やがて茶室に請じ入るゝや、清正脇差を携へて室に入らんとす。利休止めて、茶道の式、室外に於てこれを解くものなる由いふに、清正儼然としていひけるは、茶の式はさもこそ



あらめ、されども刀劍は武士の魂なり。清正に於ては茶室と他所とを論ぜず。武士の魂は瞬間も身を放ちがたし。」とありければ、利休

うち笑ひて、「さらばさても候べし。」とて許しぬ。

清正はすきを伺ひ刺殺さんと、利休が式を行ふ手前を目

劍 劍

挿繪 千利休茶室。

一 刺

も放たずまもり居るに、利休従容として式を擧ぐる程、釜をあぐれば釜盾となり、火箸をとれば火箸盾となりて、打込むべきすき間たえてなければ、少しく心に怪しむ折から、利休はやをら釜をとりて、之をかくと見る程に、忽ち爐中に覆しければ、灰はばつと室中に立ちみち、目口鼻に入るに、清正覺えず障子を放ち前庭に飛び下りたり。其の時利休は清正の残しし脇差をとり、靜に清正を呼びて、「加藤殿、武士の魂はいかにせられしぞ。かくても尙利休を殺さんとせらるゝか。」といひけり。

是に於て清正甚しく愧ぢ、且つ茶道の自ら心膽を練りて、機を察するに敏ならしむるものなるを知り、終に意を傾けて利休に師事し、以て茶道を修行せりとぞ。〔不盡酒舍遺稿〕

怪 怪

一四夕立

徳富 蘆花

今日は早夕飯を食つて居ると、北から冷りと風が來た、眼を上げると、果然北に一團紺青色の雲が立つて居る。其の紺青の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や、檜の木立、孟宗竹の藪などが生々しい緑を浮かして居る。

「夕立が來るぞ。」

主人は大聲に呼んで、手ばやく庭の乾物、履物などを片づける。裏庭では下婢が駈けて來て洗濯物を取り入れた。

やがて、食卓から立つた妻兒が下りて來た頃は、北天の一隅に埋伏して居た彼の濃い紺青色の雲が、倏忽の中にむらむらと湧き起つて、何の艶もない濁つた煙色に化り、見る見

徳富蘆花 名は健次郎。熊本縣の人。文學者。昭和二年歿、年六十。

〔縁〕

る天空を這ひ上り、大軍の散開するやうに、東に西に天心にずら／＼と廣がつて來た。三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を睜つて此の夥しい雨雲の活動を見た。

青空は南の一軸に巻き覺められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其の青空をすら餘さじものをと、南を指して、ひた押しに押し寄せて居る。つい今しがたまで雨を戀ひしがつて居た乾き切つた眞夏の喘ぎは、何處へ往つたか。唯十分か十五分の中に、大地は恐しい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい黯い冥府になつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流るゝ雲、渦まく雲、眞黒になつて動かぬ雲、雲の中から生まるゝ雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北

乾く／＼か。わく。閉ぢこむ

から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突をこゝに集めて、煤煙の限りなく湧くやうに眼を驚かす雲の大行軍の音響を聞かぬが不思議である。

彼等は驚異の眼を睜つて、此の活動する雲の下に魅せられたやうに佇んだ。冷たい風がすら／＼と顔に當る。紫の電光は時々ばつ／＼と天の半壁を輝かし閃めく。近づく雷雨を感じつゝ、彼等は猶頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は、ます／＼南に流れた。水のやうに霧のやうに煙のやうに、空は皆恐しい勢を以て動いて居る。仰ぎ見る彼等は、流るゝ雲に引きずられて、やゝもすれば駆出しさうになる足を、踏みしめ踏みしめ立つて居な

光一クワウ

ければならなかつた。時々西の方で、或る一處雲が薄れて、探照燈の光めいた生白い一道の明りが斜に落ちて来て、深い深い井の底でも照らすやうに、彼等と其の足下の芝生だけ明るくする。彼等ははつと驚惶の眼を見合はす。かと思ふと、怒れる神の額の如く、最早眞黒になつて居る。妻兒の顔は土色になつて居る。草木も人も息を屏めたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。何處から来たか犬のデカが不安の眼つきをして見上げつゝ、大きな體を主人の脚にすりつける。空はとう／＼雲をかぶつてしまつた。著しく水氣を含んだ北風が、ばつ／＼と顔を撲つて来た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は急いで家に入った。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸をしめた。暗いのでラ

惶一クワウ

屏一屏

ンブをつけた。

ざあつと降り出した。雷が鳴る。一夜の雨脚を凄じく見せて、びかりと電が光る。ざあ／＼と恐しく降り出した。

見る／＼庭は川になる。雨が飛石を打つて、勿ねかへる。目に入る限りの青葉が一葉一葉に雨を浴びて、嬉しさうにぞくぞく身を震はして居る。

「あゝ、好いおしめりだ。」

斯う云つた彼等は、更に、

「まだ七時前だよ、まあ。」

と下婢の云ふ聲に驚かされた。

夕立から本降りになつて、雨は夜もすがら降つた。

―(みゝずのたはごと)―

一五 造化のたくみ

土井 晚 翠

嗚呼うるはしき天地の、

たくみをいかにたゝへまし、

月日めぐりて年逝きて、

かはるいくそのけしきぞや、

春の歩みの着くところ、

地に花かをり草いろひ、

はるの呼吸の行くところ、

空に蝶舞ひ鳥歌ふ、

土井晚翠 名は林吉。明治四年仙臺市に生る。英文學者。第二高等學校名譽教授。

清きは夏の夕河原、
涼しきながめ見よやとて、
空に月照り風そよぎ、
地に露結び水流る。

しぐれも雲も時めきて、
秋のゆふべの色よ、はた
谿は紅葉のあやにしき、
嶺は友よぶ鹿のこゑ。

冬はあしたの朱のいろ、
色なき空に色ありて、

雪のこずゑに梅かをり、
うめのこずゑに雪かゝる。
あゝいつくしき天地の、
たくみをいかにしたゝへまし。
同じ一日の空合も、
遷るいくそのながめぞや

—(晚翠詩集)—

一六 鳥飼藏人

五十嵐 力

五十嵐 力 第六課の註を
参照。

奥州の白河に鳥飼藏人といふ弓射の名人があつた。或日諸國行脚の老僧が訪ねて来て、

「御主人に御目にかゝりたい。」

と言つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、

「拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたものでござる。近頃不躰なる御願ながら、生涯の思ひ出に貴殿の御射術を拜見させて戴きたいと思ふが、叶ひますまいか。」

と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

「では拙い藝を御覽下さい。」

場場

と言つて、弓を取つて矢を番へた。同時に茶碗になみくくと

水をついで左の臂に載せた。第一の矢を放つたと見る中に

二の矢が繼ぎ、三の矢が繼ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が

繼いだ。前の矢の筈に後の鏃が相接して、數本の矢がただも

う一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働の中に在

つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂

の上の茶碗の水にはさゞ浪だに立たなかつた。一つ一つの

矢が的の正鵠を射たことはいふまでもない。

老僧は感嘆して「あゝ」といつたが、やがてつぶやいて、

「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。」

と言つた。藏人は聞きとがめて、
「御僧、何とおつしやりました。」

一載

隙隙

と尋ねた。老僧は、

「いや、詞で御答は出来ませぬ。拙僧と一緒に山へ御出で下さる。」

と言つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

二人は遂に高い山の絶壁に攀ぢ登つた。断崖は一面に苔むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立てて渦まいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を託するに足るだけである。

老僧は先に立つて、悠然として藏人をさしまねいた。見れば藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして冷汗は衣をしぼつて、踵まで沾して居る。老僧は言つた。

「足懸りは此の通りの大磐石で、向うには松が枝に鳶が止

つてゐて無類の的でござる。さ、御弓勢を御示し下さい。」
藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い山深い淵に臨まうとも、神氣の變るものではない。然るに御事は前には誇る色があり、そして今はおどろ／＼して居られるではないか。まだ一御奮發を要ませうぞ。」

藏人は我慢の夢をさまして再び懸命の修行をした。そして遂に驕ることなく、恐ることなき至上の達人となつた。

—(甲鳥園隨筆)—

一七形

菊池寛

菊池寛 文學者。明治二十二年高松市に生る。

侍大將 役名。

五畿内 畿内五國。山城・大和・河内・和泉・攝津。

筒井・松永…… 筒井順慶・松永久秀は大和を、荒木村重・和田惟政は攝津を別所長治は播磨を分領。

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内・中國に聞えた大豪の侍であつた。その頃、畿内を分領してゐた筒井・松永・荒木・和田別所など、大名・小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は恐らく一人もなかつたであらう。それほど新兵衛はその扱しほき出す三間柄の大身の槍の鋒先で、魁殿しんがらの功名を重ねてゐた。その上彼の武者姿は戰場に於て水際立つた華やかさを示してゐた。火のやうな猩々緋の陣羽織を着た彼の姿は、敵味方の間に輝くばかりのけざやかさを持つてゐた。

「あゝ、猩々緋よ。」と、敵の雜兵は新兵衛の槍先を避けた。味方

猩々緋 極めて鮮かな濃い朱色。

が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに、敵勢を支へて居る猩々緋の姿は、どれほど味方に取つて頼もしいものであつたか分らない。又嵐のやうに敵陣に殺到する時、その先頭に輝いてゐる猩々緋の陣羽織は、敵に取つてどれほどの脅威であつたか判らない。かうして槍中村の猩々緋は、戰場の華であり、敵に對する脅威であり、味方に取つては信賴的であつた。

或日、元服してからまだ間もないらしい年若な侍が、新兵衛殿折入つて願ねがひがござる。」と、新兵衛の前に兩手を突いた。新兵衛は、何事ぢや、そなたと我等との間に左様な辭儀は入らぬぞ。望のぞみといふを早う言うて見い。」と、育そだくむやうな慈顔を以て相手を見た。外の事でもをりない。明日は我等初陣ぢや

辭儀 遠慮。

をりない ありませんね。ござらぬ。

ほどに、何ぞ華々しい手柄をして見たい。就いては、御身様の
猩々緋を貸してたもらぬか。あの陣羽織を着て、敵の眼を驚
かして見たうござる。は、ハ、ハ、念もないことぢや。」と、新兵衛
は高らかに笑つた。新兵衛は相手の子供らしい無邪氣な功
名心を快く受入れることが出来た。だが、申して置く。あの陣
羽織は、申さば中村新兵衛の形ぢや。そなたがああの陣羽織を
身に着ける上からは、我等程の肝魂を持たいで叶はぬこ
とぞ。」と言ひながら、新兵衛は再び高らかに哄笑した。

その翌日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の
軍勢と鎬を削つた。戦が始る前、いつものやうに猩々緋の武
者が敵勢を尻目に掛けて大きく輪乗をしたかと思ふと、駒
の頭を立てなほして、一氣に敵陣に乗入つた。吹分けられる

たもらぬか 賜はらぬかの
約轉。下さらぬか。
念もない。「念なう」の轉。
案外なことといふ。

鎬を削つた 烈しい戦をし
た、といふ意。「鎬」は、
刀のむねに高く通つてゐ
る筋。
尻目に掛けて 瞳だけ動か
して後方を見やること。
蔑すむ意味を含む。
輪乗 馬を輪狀に乗りまは
すこと。

やうに敵陣の一角が亂れた所を、猩々緋の武者は槍をつけ
たかと思ふと、早くも三四人の端武者を突伏せて、悠々と味
方の陣へと引還した。

その日に限り、黒革緋の鎧を着て、南蠻鐵の兜を冠つてゐ
た中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の侍の華
華しい武者振を眺めてゐた。そして、自分の形だけでさへ是
程の力を持つて居るといふことに、可なり大きい誇を感じ
てゐた。彼は二番槍は自分が合はさうと思つたので、駒を乗
出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には戦はずして浮足立つた敵陣が、中
村新兵衛の前にはびくともしなかつた。その上、彼等は猩々
緋の敵中村に突亂された恨を、この黒革緋の武者の上に復

南蠻鐵 足利時代の末から
江戸時代にかけて舶來し
た、精錬された鐵。

浮足立つ 逃げ腰になる。

讐しようとして猛り立つた。

新兵衛は平生とは勝手が違つて居ることに氣が付いた。平生は虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵にあつた。彼等が狼狽して血迷うてゐる所を突伏せるのに何の雜作もなかつた。今日は、彼等は對等の戦をする時のやうに勇み立つてゐた。どの雜兵も、どの雜兵も、十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せる事さへ容易ではなかつた。敵の槍の鋒先が、ともすれば身を掠つた。新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つた。併し彼は、ともすれば打負けさうになつた。手輕に猩々緋を貸した事を後悔するやうな感じが頭の中を掠めた時であつた。敵のつき出した槍が鎧の裏をかいて、彼の脾腹を貫いてゐた。

—(我 鬼)—

裏をかく 裏まで突きとほすこと。

一八 西郷と大久保

山本 有三

大久保邸客間

床に

相看兩不厭

只有敬亭山

と大書した幅が掛かつてゐる。

伊藤博文が椅子にかけて待つてゐる。稍々待ちくたびれた形で幅などを見てゐる。

家令が入つて来る。

家「大變お待ちを願ひまして。もう間もなくお歸りになると存じますか……」

山本有三 本名は勇造。明治二十年栃木縣に生る。小説家。劇作家。

西郷 西郷南洲。名は隆盛。維新元勳。明治十年城山に歿。年五十一。

大久保 大久保利通。維新元勳。鹿児島市鍛冶町に生る。明治十一年歿。

伊藤博文 山口縣萩の藩士。初代の内閣總理大臣。明治四十二年ハルビンにて薨。年六十九。

伊「いや。——先程から感服してゐるんですが、見事な書ですね。」

(幅の近くに寄り)

雪蓬といふのはどういふ人です。

家「何でも西郷さんが沖の永良部島へ島流しにおなりになつた時、この方もそこにおいでになつたので、お知合ひになつたのだとか伺つて居ります。たしか西郷さんはこのお方から、いくらか書をお習ひになつたのぢや御座いませんかね。」

伊「ふむ。それにこの句がいい。相看ふたつながらて兩ふたつながら厭あきらはず。只敬亭山有ふたつながらり。實ふたつながらにいい句だ。」

家「雪蓬といふ方は、この李白の詩が大層好きで、筆をお執

李白 字は太白。青蓮と號す。唐代の詩人。

りになると、この句ばかりお書きになるんださうです。——あ、お歸りになりました。」

大久保が入つて来る。

大「どうも不在にして御無禮致しました。何か急用ですか。」

伊「少々御意嚮を伺ひたいことが御座いまして。」

大「さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……」

伊「あ、あの件ですか。如何でした。お引受になりましたか。」

勝さん 勝海舟。徳川末期の政治家。明治三十二年歿、年七十七。

大「それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐに後繼内閣が組織出来ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なあに五參議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。」

五參議 西郷隆盛。後藤象二郎。板垣退助。江藤新平。副島種臣。

伊「實はその辭任問題について上りましたのですが、西郷さ

んの辭表はどう裁きましたものでせう。」

大「それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。」

伊「辭任を聴き届けよといふのでございませう。併し外の方と違つて、西郷さんでございませうからな。岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰せになつて居りますのですが……」

大「いや、引留める要はありません、止めたいといふものは止めさせる方が却つてよろしい。その方が當人の爲です。」

伊「けれども、それは如何にも忍びないことですから……」

大「いや、無駄な手数は省くことです。第一、引留めようとしたとて留るやうな西郷ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたではありませんか。」

伊「それはさうですが……」

大「陸軍大將だけは従前の通りといふことにして、參議並びに近衛都督はお役御免になされるのが、此際至極の御處置と思ひます。」

伊「なほ躊躇しながら」「それでよろしうございますかね。」

大「きつぱり」よろしいですとも。」

伊「西郷さんの辭表が出た時、僕はあなたこそ第一にお引留めになる御方と思つて居りました。御意見の相違は相違、これはこれで、また別ですからな。」

大「いや、この際は引留めないのが本當です。彼を引留めない者こそ、彼を最もよく知つてゐるものといふべきでせう。氣まゝにさしておやりなさい。その方が却つて西郷もう

ためらう

るさくないでせう。」

伊「さうですか。」

大「わたしはいつかはかういふ日の来ることを臆げながら豫期してゐました。今回の事がなくとも、これは早晚免るることの出来ないものです。それが今來たまでです。この事は戊辰の役に於て鐵砲の音がはたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間です。例へば冬と夏とのやうなものです。二人は當然離るべき運星なのです。」

伊「併しお二人は今日まで、殆んど一體のやうになつてお働きになつたのではありませんか。」

大「御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたから

戊辰の役 明治元年、所謂官軍と、舊將軍家に加擔せる所謂幕軍とが國內に於て行つた戦争。

大「です。夏のさ中に、雪が降るやうな時勢であつたから、それが目立たなかつたのです。けれども物事が緒について、事候が追ひ／＼定まつてくれば、夏は夏、冬は冬、それぞれ其の位置に返るのが順當でせう。そして夏は夏らしく冬は冬らしくあつてこそ、然るべきものだ、わたしは思つてゐます。」

伊「西郷さんも、さう思つておいででせうか。」

大「さ、西郷はどう思つてゐますか。」

問

大「伊藤君、西郷が今度、どうして、あんなに向きになつたのか知つてゐますか。」

伊「向きになつたといひますと、……」

大「あの男はいつも黙々として居つて、滅多に自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、汝のいいやうに。さう云つて、決して逆らつたことがありません。功は人に譲り、自分はいしるに引下がつてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつかまへませんでしたか。」

伊「自身の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思つて居りましたが……」

大「それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實は死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。」

伊「無言。大久保の顔を覗くやうに見る。」

大「あの男は死を急いで居るので、いつか私にこんな事を

言つたことがあります。己はもう、一度死んだのだから、天地に家はないのだ。知つてゐるでせう。彼は月照和尚と海に投じて、自分だけ助かつた、あの事をいふのです。」

伊「存じてゐます。」

大「それからまた、自分を取立てて下すつた順聖公様がおかくなつた時、西郷は追腹を切らうとして果さなかつたこともあるのです。それやこれやで、自分は主におくれ、同志におくれてゐるといふ慚愧の念が、絶えず頭にあるのです。その上現在の三郎公にはひどく疎まれて居りますし……」

伊「なるほど……」

大「ですから、どうせ捨てる生命なら、朝鮮に行つて捨てたい。」

月照 京都清水寺成就院の住職。尊王攘夷家。安政五年十一月幕吏の追捕に窮し西郷と共に薩摩灣に投ず。四十六。

順聖公 島津齊彬。安政五年歿。年五十。

三郎公 齊彬の弟、島津久光。明治二十年歿。

そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。かう西郷は思つてゐるのです。わたしは彼のさうした心の中を思ふと、實際死なしてやりたく思ひます。死なしてやるのが、むしろ西郷を生かしてやることのやうにも思ひました。併しわたしまでがそんな心に引入られるやうであつてはなりません。どんな事をして、西郷には生きてゐて貰はなくてはなりません。國家の大局からは申すまでもなく、西郷一身のためから申しても、斷じて彼を死なせることは出来ません。西郷は恐らくわたしを怨んでゐるでせう。併しどんなに怨まれても、わたしは彼を殺すわけにはいきません。——ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を追

つたことがあるのですよ。」

伊「あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですネ。」

大「わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁度西郷が大島から召還されて、三郎公のお伴をして京へ上る時のことでした。殿にはもともと御覺えがよくないところへ、憂國の心からとは申せ、御言付を待たないで、西郷が少し取計つた事をしたために、彼は忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つくゞ、世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんな事になつては、もう討幕の望も何もない。こんな位ならいつそのこと、二人刺し違へて死んでしまつた方がましだ。さう決

心して、彼を濱邊に誘ひ出したことがあるのです……。
伊「それが今度は、思はない事で刺し違へてしまつたわけですね。」

大「人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつた。西郷がいつかわたしに云つたことがあります。人間は死なうとしてもなか／＼死ねるものでなく、生きようとしても案外生きられないものだ。それを聞いた時にはそれ程にも思ひませんでした。が、わたしは今その言葉をしみ／＼思ひ出します。」

書生が這入つて来る。

書「あの西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。」

大「國へか。」

書「はい。ただ今役所から知らせて参りました。」

大「さうか。——とう／＼歸つてしまつたか。」

伊「すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰しやつた通りにする外はありませんな。」

大「うなづく。」

伊「では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。」

伊藤去る。

大久保書生を呼ぶ。

大「おい、その掛物を掛け變へてくれ。」

書「何を掛けませう。」

大「何でもいゝ。南洲のものを掛けてくれ。」

書生幅を掛けかへる。それは

「盡人事竣天命南洲書」

と書いた一軸である。

書「これでよろしうございますか。」

大「うむ。」

書生去る。

大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明かい。

西日を受けた障子に庭の松影が黒々とうつつてゐる。

大久保じつと黙したまゝでゐる。

幕

—(西郷と大久保)—

「盡人事竣天命南洲書」
人事ヲ盡クシテ天命ヲ竣
ツ 南洲書

一期終り(七月十九日)

一九 秩父宮殿下に扈從し奉りて

林 權 助

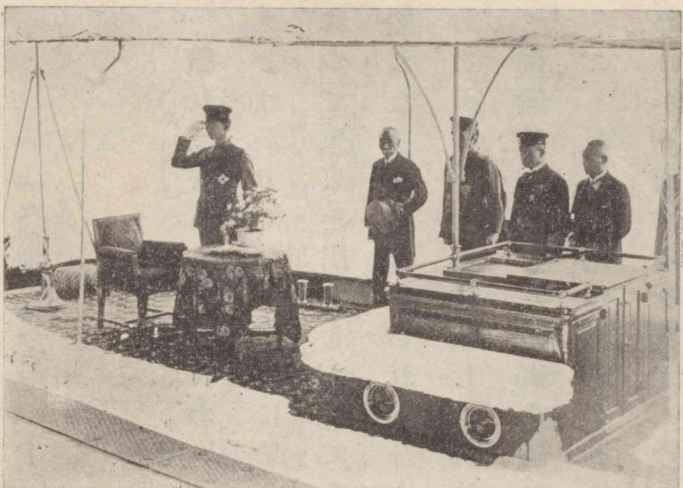
願れば、去る六月二日、われわれは随員としての使命の重
さとはかり知れぬ感激に胸を迫らせながら殿下に扈從し
奉つて、東京を出發したのである。御車中に於ける殿下に御
疲れなきやうわれわれはひたすらこれを祈り奉つたので
あるが、日常御規律正しき御生活と各種のスポーツによつ
て、御鍛鍊遊ばされた御身體には、車中で御一夜を明かされ
ることなど問題のほかであらせられた。却つて随員のわれ
われが赤面するを禁じえなかつた次第である。かくて三日
午後三時三十分、殿下には門司にて御待ち申上げてゐた御

林 權助 萬延元年舊會津
藩に生る。男爵樞密顧問
官。
去る六月 昭和九年。

召艦「足柄」に御乗艦遊ばされたのであるが、晴朗なる天氣は、

殿下の御渡滿を祝福し、海路御恙なき御旅路を御祈り申上ぐるかに思はれた。

滿二日に餘る海上の御生活である。空は晴れたりといへ、何時風波に遭遇せぬとも限らぬ、われわれはまたしても不安であつた、自分はこの天候について横山艦長などと言葉をかはしたのであるが、何事もなからうとの話に



御召艦「足柄」一等巡洋艦、排水量一萬噸。

挿繪 御召艦上の秩父宮殿下。シルクハットを持つるが林權助男。

横山艦長 名は菅雄。海軍大佐。

踴躍した。玄界灘も風は強かつたが、御召艦に動搖はなかつた。これも偏に限りなき殿下の御威光の賜である。艦内において殿下にはわれわれ隨員並に士官などに、畏くも御陪食

を仰せつけられた。足柄乗組員一同にはまた御持參の菓を賜はつた。陸の宮殿下には艦内の御生活には非常に御興深く感じ遊ばされた御模様を拜し奉つた。殿下の御求めにより艦長が御案内申上げ、艦内を御巡視遊ばされたのであるが、高熱の機關室まで御降り遊ばされるのには、餘りの御事にわれわれはただ、恐懼するのみ、こればかりは私も御遠慮申上げる旨御願申上げたのであるが、殿下には御ほゝゑませられ、これを御許容遊ばされた。殿下の海軍に關する御造詣は、われわれ専門以外のものの想像も及ばぬところ

遍偏

倍陪

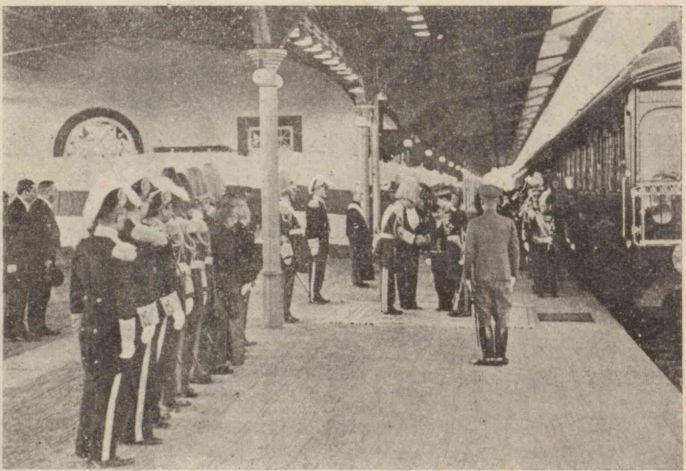
ほゝゑむ

て、御案内申上ぐる横山艦長の御説明のみでは御満足遊ばされず、御航海中、親しく艦上に出てさせられ、専門の士官達に一々御下問遊ばされ、該博なる御知識を、さらに究めさせられた。これら御下問にあづかつた士官の私に語るところは、等しく「驚嘆」の二字を出てなかつたのである。五日の早朝は雷雨にもかゝらず、殿下には御機嫌麗しく、日恰も東郷元帥の國葬に當り、殿下には御居室において故元帥の勳功を御追念遊ばされたが、畏い極みであつた。

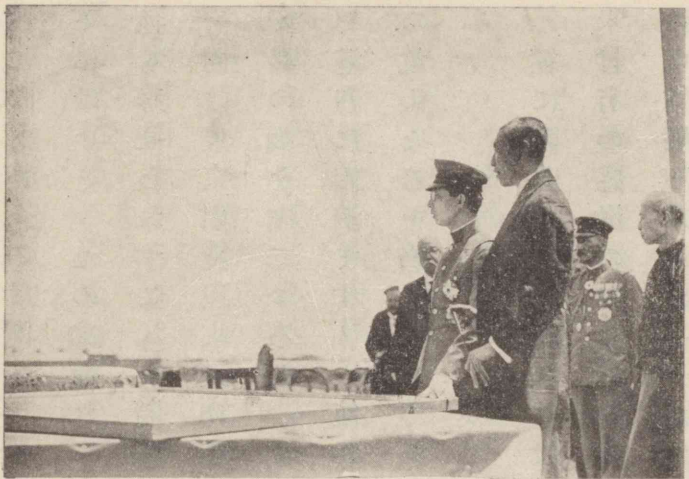
艦内への無電によれば、御召艦投錨の大連港も同じくこの朝雷雨とのことであつたが、御召艦大連御入港の砌、奉迎艦の登舷禮に答禮遊ばされるため御出まし遊ばされた殿下に隨ひ奉つてわれわれが艦上に整列した時、われわれの

眼に映じたものは、門司出港と同じき晴朗の空であつた。殿下にはいさゝかの御疲れの色も拜せられず、こゝに隨員一同は東京出發以來最初の安堵の胸を撫でおろし、一夜を港内に假泊、ますく、使命の重大なるを感じたのである。

遂に、六月六日、われわれは未曾有の感激の日を迎へた。秩父宮殿下におかせられては前日にも増して御機嫌麗



挿繪 新京驛頭に於ける秩父宮殿下と康徳皇帝の御孫手。



しく拜されるのも、隨員一同のまことに歡喜するところであつた。二昔前、今の滿洲國々都新京、當時の長春を訪れた自分は、今日こゝに光榮にも秩父御名代宮殿下に扈從の大任を帯び、建國日なほ淺き滿洲帝國に足を踏み入れて感慨無量なるものがあつた。この朝殿下には早朝御起床御準備を整へさせ給ひ、大連埠頭に御上陸遊ばされたのであるが、沿道を埋め盡した

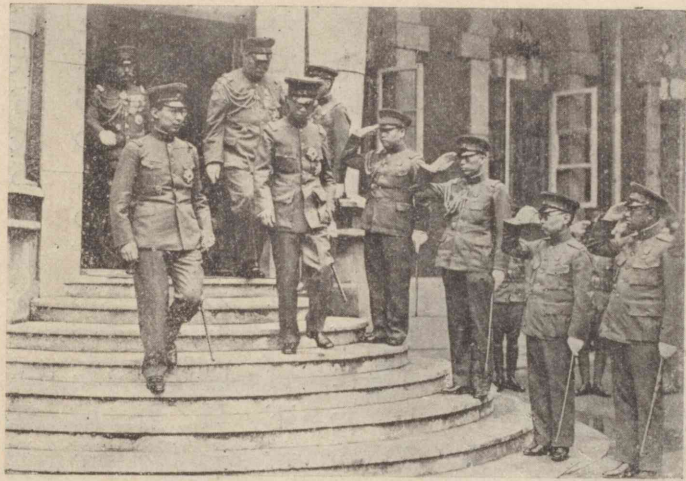
歡一クワン

挿繪 國都建設局お成りの秩父宮殿下。

準一準

旅大 旅順と大連。

旅大官民の赤誠溢るゝ奉迎は、またわれわれの曾て見ないところのものであつた。殿下には車中にて陸軍大尉の通常御禮装から御正装に御着かへ遊ばされ、その御立派なる御姿を拜してわれわれ隨員一同また新たなる感激を覺えたのである。自分は車中、殿下新京御入京の御時、畏くも友邦滿洲帝國康徳皇帝陛下におかせられては、驛頭まで殿下御出迎へのため臨御遊ばされると承り、その歴史的光景やいかにばかりであらうかと、畏いことながら様々に御想像申上げたのであるが、驛頭における御名代宮殿下と御出迎への皇帝陛下との御對面を拜して、その莊嚴さは到底われわれ老筆の形容申上げることとは出来なかつたのである。歴史は繰り返すといふ。然しながらかくの如き歴史はま



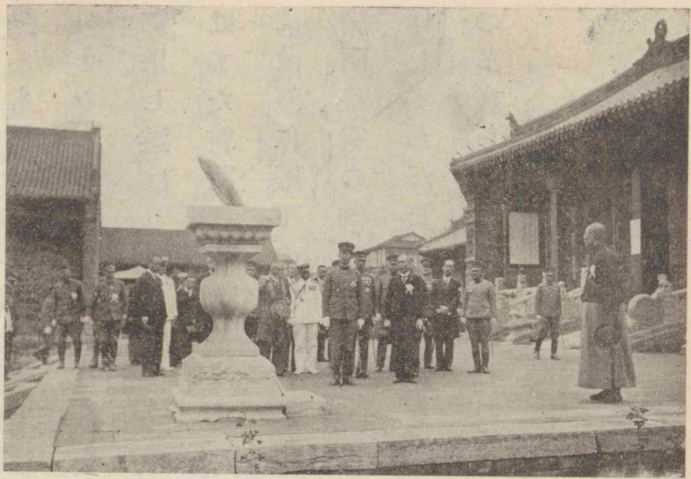
た繰り返されるものではないであらう。少なくとも餘生幾

何もなき自分にとつては、かくの如き光景を目のあたりに拜するの日はまた來るとも信じられぬのである。

殿下には皇帝陛下と御同列にてブラットフォームから階段を御降り遊ばされた。われわれ隨員はその御後に従つて御後姿を拜したのであるが、日滿兩皇室の御交誼の御濃やかさには、またして

挿繪 秩父宮殿下と御見送りの康徳皇帝。

一姿



この日こそはわれわれ全日本國民ならびに滿洲國三千

も双眸に涙の迫るのを禁じ得なかつたのである。その夜御旅館にお着き遊ばされた殿下には、私が長途の御旅に御疲れも拜せずと御機嫌を奉伺したところ、却つてわれわれ隨員の勞を犒はせられ、一同御仁慈深き殿下の御心に恐懼感泣した。明くれば御親書並に勳章捧呈の御儀式である。

眸一ボウ

挿繪 奉天博物館に於ける秩父宮殿下。

泣一キフ

萬の國民が、千秋の思ひの下にお待ち申上げた日であつた。畏くも秩父宮殿下には日滿兩國の盟ひを磐石の安きに置かせられるこの御名代宮としての重き御使命を、滞りなく御果し遊ばされたのである。随員としてのわれわれの喜びはまた言語に盡きぬものがあつた。畏くも滿洲國皇帝陛下には、直に殿下の御旅館に御答禮の函簿を進めさせ給ひ、日滿兩皇室の御交誼はこゝに全くわれわれ一同遙に東方を拜して、わが皇室の彌榮を祈り奉ると共に、友邦滿洲國皇室の萬歳をひとしく胸に叫んだのである。 —(朝日新聞) —

二〇 山の木と大鋸

志賀直哉

蟲が恐ろしかつた。小鳥の嘴が恐ろしかつた。

若芽は延びた。

今度はナイフが恐ろしかつた。杖を切りに來る人がじろじろと其の邊を見廻しながら通つて行つた。

木は漸く太くなつた。

小鳥が蟲を探しに來てよくとまる。小鳥は愛らしくなつた。併し鋸が恐ろしい。木こりが通る。あの腰の鋸でぼん／＼と二度もたゝかれ、自分は胴切にされる。早く太くなりたい。かう思つて居る内に又少し太くなつた。鋸はたいして恐ろしくなくなつた。

志賀直哉 小説家。明治十六年宮城縣に生る。學習院を経て、東京帝國大學に學ぶ。

併し鋸が恐ろしい。早く大きくなりたいが、急ぐと危ない。細い儘で延びると風に吹倒される。

蟲や小鳥を恐れて居た若芽からは三十年経つた。あと百年経たねば鋸を全く恐れぬ自分にはなれない。

或日杖を取りに来た男が、ナイフで自分の肌に彫りつけた。消えないやうにと出来るだけ深く彫りつけて行つた。自分は微笑した。併しこんな字が肌に残つて居る内は安心出来ない。此の彫つた人間が年寄になつて死んで、其の孫が又年寄になつて死ぬ時代が来なければ安心出来ない。出来るだけ地から精分を吸はねばならぬ。出来るだけ太陽の光を受けねばならぬ。而して出来るだけ延びて、出来るだけ太くならう。

百年過ぎた。

もういけないと思ふやうな嵐に何十度か出會つた。南へ延び過ぎた大きい枝を一本折られたが、幸に命にかゝはる程の傷は受けなかつた。嵐は憎らしい。自分は大きい枝を折られた時には随分腹を立てた。併し成長以外一分一厘動かす事の出来ない自分を、その暴力に對して出来るだけ抵抗の少い姿勢に變へて呉れるものは、やはり嵐自身の力だと思ふと、悪意は無いといふ氣がして、今は憎めなくなつた。兎も角もう安心だ。

官林拂下の引渡しに役人と願ひ人とが來た。木は何だらうと思つて上から見下して居た。

彼と同年輩の隣の木が、
「何しに來たんだらう。」
と彼に聲をかけた。

「小さい木がびく／＼して居るぢやないか。」

「早く行つて了はないかな。」

「おい／＼、君の根つこへ立つて僕を見上げながら、何か言つてゐるよ。」

「氣味の悪い奴だな。」

「心配はないよ。」

「おや、俺の足を何かでたゝいて居るぞ。」

「うん、鈍で皮をはいて居るんだ。」

「仕様のない奴だな。」

「矢立を出して何か番號をつけて居る。」

「氣味が悪いなあ。」

「あゝ歩き出した。歩き出した。」

「今晚吹降でもあると消してやるんだがなあ。氣味が悪くて仕様がな。」

「なに、何でもないよ。見給へ、大分向うの方の連中も番號をつけられてるぢやないか。」

「さうだね。だが、どうして君はつけられなかつたらう。」
かう言つて隣の木は羨ましさうに彼を顧みた。

一週間経つた。一人の労働者が其の森に入つて來た。暫く其の邊を見廻して、いゝ場所に地ならしを始めた。其の邊の

小さい木を鋸で伐り始めた。何處からか熊笹を澤山切つて來た。而して三日程かゝつて其處に小さな小屋を建てた。又三日程すると、石と泥とで上の丸い小屋程の竈を作つた。願ひ人がそれを見に來た。

「俺は此の木も這入るつもりだつたが、役人の奴は此處までだと言張つたよ。」

「これかね？」

と、労働者は呑みさしの煙管の雁首で、番號をつけられずに濟んだ彼を指した。

彼は其の時何か知らず身震ひを感じた。

「それさ。」

「何、わかるもんかね。ついでに伐つて了はうよ。」

「まあ、よせ〜。それ一本で盗伐で訴へられるとつまらな
5.1
と願ひ人が言つた。」

段々に大きな木が伐倒されて行つた。竈からは晝も夜も
烟が立ちのぼつた。それがたち騰らなくなると、二三日して
其の中から眞黒になつたきれ〜な木の死體が取出され
た。それは一まとめにされては傍に積重ねられて行つた。
遂に彼の隣に立つてゐた木が伐られ出した。それは見た
ことのない非常に大きな鋸だつた。一間程の長さで、その兩
端に柄がついて居た。腰を下した二人が足を根に踏張りな
がら、それをひいた。ずつ〜、ずつ〜と靜かに伐り進む。そ

の休まない静かな進行は、其の木の死を一層不可抗な物に思はせた。切口には三四本の環鐵のはまつた樫の楔が差してある。労働者は時々立つて大きなよきの尻て楔を打込んだ。こーん、く。と言ふ音は山に響き渡つた。

彼の友は従容として一言も口を利かなかつた。彼は嚴肅な感じに打たれた。

幹は一分傾きかけた。労働者は起上つて、静かに其の場を離れた。うめきと共に木は倒れて行つた。どーんといふ烈しい地響がした。其の邊の小さい木や草が煽りを受けて一度に靡いた。而して尙暫くはざわ〜と騒いだ。

それから二週間程すると、拂ひ下げられただけの木は炭

よき 斧の小さなもの。

煽り—あふり。「あかり」の如く發音する。

になり、又或物は燃し木として少しづつ労働者の爲に運ばれて行つた。其の邊一帯に廣々と明るくなつた。小さい木などは不意に日光の直射を受けて、歡喜の聲を擧げて騒いだ。日なたでは暮せない羊齒類は段々に赤く枯れ始めた。切株が並んでゐる。彼はそれを眺めながら淋しい氣持になつた。彼には今まで自分のした努力が、これだけで終るものなら、といふ感情も起つた。最初蟲や小鳥が恐ろしかつた時代から、ナイフ、鉋鋸と、それ等が一つ／＼恐ろしいものとして彼の前に現れて來た事を思つた。小鳥を恐れて居た時にはナイフを知らなかつたことを思つた。而してナイフを知つて恐れ出した時には、其の上に鉋のある事は考へなかつた事を思つた。鉋の上には鋸があつた。而して總べてを通

過したと思つた時に、彼は又更に大鋸といふものの事を知つた。彼にはもう根氣はなかつた。同時に不安も不満もなくなつた。併し彼は過去を顧みて、徒勞に歸した其の努力を悔いはしなかつた。否徒勞といふ氣もしなかつた。彼には鋸を通過しようとしてゐた時代のあせる氣分は、今は全くなくなつた。而して同時に大鋸を知る前の少しだけたやうな安心もなくなつた。それは如何にも淋しかつた。併し其の淋しさの中に彼はある安定を得た。

—白樺の森—

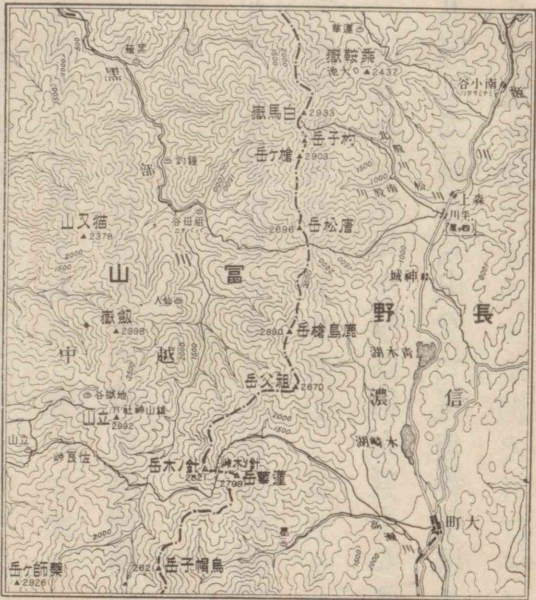
何とかして生活を失ふことがないやうにと、臆病な氣づかひをしてゐるものは、決して人生を喜ぶことがない。

(カント)

カント (1724—1804) イツの哲學者。

二 白馬尻より大雪溪へ

鈴木文史朗



大な鰐—そんなものがあるなら—が腹ばひになつて山を

白馬尻へ着いたのは午後三時頃であつた。日はかん／＼照つて、汗を拭き／＼歩いて來た僕等には、下の平地と變らぬ暑さだと思へるのに、こゝに大雪溪が眼の下から展けて居る。眞白い巨

鈴木文史朗 本名文四郎。明治二十三年、千葉縣に生る。東京朝日新聞記者。白馬尻 白馬嶽の麓。白馬嶽は、信濃・越中の境に聳える高峯 標高二、九三三米。

挿繪 白馬嶽附近要圖。

登つて行くやうな感じでもある。

「こゝに泊るのはまだ少し早いやうだが、どうしよう。」

と案内人に訊くと、

「ぼつ／＼行つても六時か七時頃には頂上の小屋に着けませう。」

と事もなげに言ふ。そこで、三人は用意の標かんじきを靴の下に付けて、雪溪を登りはじめた。

はじめ一寸見た時は何んでもなささうであつたのが、登り出して見ると、山の一年生等にはさう容易でない事が分りはじめた。

雪溪は可成りな急傾斜で、雪は固くなつて居るので、足はともすれば滑り勝ちである。時々山の頂上あたりから霧風

標



がさつと吹いて来て行手が薄暗くなるかと思ふと、またつぎの瞬間には直ぐに晴れ渡る。右手に幾つもの雪の支溪がある。霧や雲にあたりが閉されて、その支溪に迷ひこんで死んだ學生もあつたといふ案内人の話。

「その學生は一人だつたかね。」

「案内人が随いてゐれば、こんなところでそんなへまはしませんよ。」彼はこゝぞと自分の職業の宣傳をやつたものである。

僕等が白馬尻を立つ時、中學三年生位の少年が、五十近いお母さんと二人連れて登つて來たのが道伴れとなつた。全く格好な道伴れである。お母さんはさすがに雪溪を登りはじめてから難儀らしかつた。少年は學校のグラウンドをか

けるやうに、さつさと先に登つて行つては、後から我々と一
緒に息せき切つて登つて来る
母親を待つてゐる。この少年の
態度は僕にはあまり愉快でな
かつた。

「君、少しお母さんの腰でも押
してやり給へ。」少年が待つて
居た場所まで辿りつくと、僕は
かう言つてやつた。

「なあに、あなた、この子はとて
も駄目なんですよ。」とお母さん
が、可愛くてならないやうな口



挿繪 白馬の雪溪(一)。

調で先づ返事した。

「だつて、この山登りは、お母さんが言ひ出したんだもの。」
と少年がその次に言つた。母親は賢明さうな顔をした小づ
くりの婦人であつた。五十近い母親の發案で、少年の息子と
二人の山登りはいろ／＼な事が想像されて、面白いと思つ
た。

一同が休んでゐる間に、又一しきりの風が溪谷を吹きお
ろして来て、少年の母親が雪の上へ置いた杖を、コロ／＼と
轉がして行つた。その雪溪の斜面が急なため、杖は堅い音
を立ててどこまでも轉がつて行く。二三丁ほど下へ行つて
やつと止つた。この母親には、この大雪溪に入つての一本の
杖は全く息杖であつた。これがなくては歩行力が半減され

杖一つ。

る。併しそのために三丁の雪の急坂を上下するのは少くと

もこの中老婦人には不可能だ。併し、この息子はそれをするにはやんちや過ぎて見えた。

「わけありませんよ、お母さん。」と
言つて、母親も僕等も何んにもいはぬ前に、少年は杖を取りにとつと降り出した。母親の顔は喜びと誇りに光つた。



の傾斜は急になる許りであつた。大兵肥満のA君は全くは

「それぢや、一足お先きに。」僕等は安心して、又登りはじめた。雪溪

挿繪 白馬の雪溪(二)。

じめてのからした登山だけに、ことに疲れをはやく感じ出した。I君は一番の年長で、銀髪がそろそろ見え出してゐるが、身體のつくりがスマートに出来てゐるためと、多少の経験もあるのとで一番元氣だ。僕は先づその中間であつたらしい。

大雪溪を登り終るのに、三時間は優にかゝつた。

―(空の旅地の旅)―

三 三 蜃 氣 樓

橘 南 谿

唐土の詩文にも多く作りて、もてはやせる蜃樓といふあり。又海市といふ。海上に雲の如くに氣立ち昇りて、樓臺城郭の形を現し、其の中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、これ大海の底にある大いなる蛤の氣を吐きて、空中に樓閣の形を現すなりと。又蜃といふは、其の形龍の如きものにて、海中に棲んで氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。色々の説あり。蘇東坡なども、南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚だ珍しがりて賞玩することとぞ。

我が國は四方皆海にて、いづれの地方の人も海を見ざる

橘 南谿 宮川氏、名は春暉。伊勢の人。京都に住んで醫を業とし、暇あれば常に諸國を旅す。文章家。文化二年(二四六五)歿、年五十三。

蘇東坡 名は軾。宋の文人

者なきに、此の蜃氣樓を見たるは甚だ稀なり。たゞ越中の魚津といふ處に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收まり、海上霞み渡りて、鏡の打ち曇れるが如き日に、此の蜃氣樓を結ぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶことあり。

誠に唐土の人のいへる如く、海上に烟の如く次第に結び來りて、遂には樓臺の如く、城郭の如く、人馬の往來せる如きも歴々として見ゆといふ。

北地に我が親しく交りし宮島式部大夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初は幕を引ける如くなりしが、暫く見る間に、城郭の如く、矢倉高塀やうのものも見え、矢間などの如きものも見え、又暫くする間に、松原の如く、繪にか

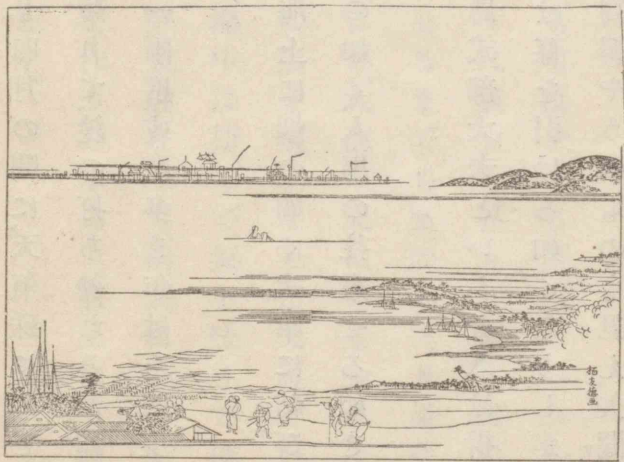
魚津 富山縣(越中國)下新川郡魚津町。

收 収

矢倉 城壁又は城門の上に築いたたかどの。
矢間 城中から矢を放つため、又は城外を望むため、矢倉又は城壁に設けた窓。

ける天の橋立などの如く見えけるが、夕暮に及び、風少し出でたれば、漸々に消え失せて、跡形もなくなりしとなり。

富山よりは僅に六里隔てたるところなれば、城下の人皆見物したく思へども、何時結ぶかも知れがたく、又結びたる時、急に人して告げ知らずとも、其の間には消え失せて見るべからず。此の故に魚津近處の海邊の人は例年見ることなれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯終に



天の橋立 丹後國(京都府)與謝郡にある。日本三景の一。
富山 富山縣(越中國)富山市。

挿繪 蜃氣樓。

見ざるもの多し。

余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して蜃氣樓を見るべしと、人にも勧められ、余もまた年頃の望みなりしかど、富山にありし頃は、正月・二月なれば、それより三・四月まで越中に逗留せんこと餘り長々しければ、残念なりしかども、見ずして越後に越えたり。

越後の糸魚川にて松山茂肅に此のことを語りしに、此の人も糸魚川の海中遙に山の出で来るを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて折々見ることなりといひしと語られき。

余初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃樓は大洋にある事にて、陸地近き入海にはなきことのやうに心得し

留

糸魚川 新潟縣(越後國)西頸城郡。
松山茂肅 名は造。糸魚川の素封家。儒者。寛政六年(二四五四)歿。

が魚津の地理を見るにさにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向うの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風の如くに見る。魚津の海は東よりの入海なり。海中より蒸し騰る陽氣が、向うの山に映じて色々の形を見するなり。向うに當なく、數百千里見はらしたる大海にては陽氣のぼると雖も、向うの當無ければ映ずることなくして、人の目に見えがたしと覺ゆ。伊勢の桑名の海にも三十年五十年の内には、たまたま蜃樓を結ぶ事ありといふ。これも向うに尾張・三河の山を受けてある故なるべし。また安藝國にてもたま／＼はありといふ。これも向うに山あり。その外の國にては蜃氣樓をむすぶ事いまだ聞かず。奇を好む人は三四月の頃越中に遊びて、此の樓臺を見るべきことなり。

〔東遊記〕

桑名 三重縣(伊勢國)桑名郡。

東遊記 五卷。著者が東海・東山・北陸を遍歴した間に見聞した奇事異聞を録した書。

二三 訓練の相違

金子堅太郎

それは私がワシントンに滞在中のことであつた。ウォルダ夫人といふ非常な金持の未亡人が、私の友人の大審院判事ホーム氏を通じて、私を晚餐會に招きたいから來てくれろ、と言うた。この未亡人には二人の娘さんがあつて、ワシントンの交際社會では有名な人達であつた。私はどんな人でも招かれれば行く。黒奴でも靴磨きでも、一人でも多く日本に同情を寄せさせたい。況んやワシントンの交際社會で隆々たる勢力のあるウォルダ夫人と二人の娘の招待であるから、喜んで往くと返事した。その晩の食後に、總領娘が私に聞きたいことがあるといふ。

金子堅太郎 嘉永六年福岡縣に生る。樞密顧問官。伯爵。
ワシントン 北米合衆國の主都。

「實はこの二三週間前、或る晚餐會で、ロシアの大使カシニ
ー伯に會つた。所がロシアの大使が列座の人々に向つて、傲
然として『戦争は始まつたが、日本の陸軍などといふものは、
ロシアの陸軍に比較すると、とても敵對は出来るものでは
ない。見てゐて御覽なさい。一、二箇月のうちには、日本の軍隊
は、かはいさうだが全滅する。その譯は、ロシアの軍隊の訓練
といふものが斯うである。野營をして居る時でも、又兵營に
居る時でも、士官と兵卒とは殆ど親子兄弟の如く親密であ
る。みな車座になつて、ウオッカといふ酒を飲んで、階級的の
差別は無い。兵卒が唄をうたへば、士官が樂器を鳴らす。ひと
りで踊るものもあれば、相携へて舞ひ廻るもあり、その團樂
の愉快なことは、世界各國の軍隊にも類はない。しかし此の

カシニー ロシアの外交官
支那を煽動して日清戦争
を起さしめた人。

訓練

秘密

ウオッカ ロシアの火酒。

軍隊に一旦進軍の命令が下つて敵に向つたなれば、殆ど別
人の如く、兵卒は猛獸のやうになつて、如何なる敵と雖も蹴
飛ばして行く。その勇猛なことは、平時團樂して愉快に酒を
飲み、歌ひつ舞ひつした時とは、まるつきり變つたものであ
る。見て居て御覽なさい。今度日本の軍隊を追ひ捲くるのは
譯はない。』と言つた。私は眞實日本に同情を寄せてゐる一人
であります。この言を聞いて、日本の兵隊が負けはせぬか
と心配でならぬから、貴下を御招待して、日本の軍隊はどう
いふ風に訓練をなされてゐるのか、お話を願ふ考へてござ
いました。この猛獸の如き露兵に當らなければならぬので
すから、定めて困難でありませうが、どういふ訓練法になつ
てゐますか。」

酒酒

單刀直入に質問を發して來た。

一座の面々は、この突然の質問に、如何に私が答へるか、私の顔を見詰めてゐた。私は、當意即妙といふ筆法で直ちに答へた。

「いかさまロシアの兵隊の訓練は、さういふ情況であることは、私も豫て聞いて居るが、しかし日本の軍隊の訓練はそれとは少し違ふ。日本の軍隊は、兵營に於て毎日訓練する時は集合喇叭を吹く。さうすると兵隊が一小隊づつ練兵場に並ぶ。その前に出て將校が劍を抜き、儼然たる態度を以て號令をかける。氣を付け、本官が此の劍を抜いて命令するのは、天皇陛下の御命令と心得る。此の劍は、天皇陛下の御意志を代表するものである。我が天皇陛下の軍隊は、吾が輩が此の

況況

抜抜

劍を握つて號令することは凡て陛下の御命令と心得て、如何なることを命令するとも必ず之に服従せよ。若し戰場に於て吾が輩が鐵砲の彈丸で斃れたならば、下士官直ちに此の劍を執つて號令せよ。若し下士官が戰死したならば兵卒之に代れ。一兵死せば一卒これに代り、かくして代り、最後の兵卒に至つて、此の劍を握つて地に倒れて死ぬのが日本の軍隊の精神である。』と、かういふ具合に日本では軍隊を訓練してゐる。皆さん、日露兩國は、どつちが勝つてせうか。』といふと、列座の人々は一齊に手を拍つて、
「日本が勝つにきまつてゐます。」
と言つた。

此の事に就いて、私は、米國から歸つて來てから、一言言つ

て置かねばいかぬと思つて、寺内陸軍大臣に會つて、
「私はアメリカに於て、日本軍隊の訓練法を聞かれたので、
斯く斯くと答へた。若し私が嘘を吐いたといふことになつ
ては洵に困るから、君に一つ確めるが、どうだ。」
と言つて、前に述べた當意即妙の答辯を話したところが、
「それは實に其の通りだ。君の言つた通りの精神で軍隊の
訓練はしてゐる。」
との答なので、
「さうか、それで私も安心した。」
と言うた。

寺内陸軍大臣 名は正毅。
陸軍大将。元帥。大正八
年歿。年六十八。

「さうか、それで私も安心した。」
と言うた。

—(日露戦役秘録)—

二四 東郷大將

世界の海戦史上、最も赫々たる名聲を博するものは、英國
の水師提督ネルソンなり。彼はトラファルガルの一戦に於
て、佛國の艦隊を全滅せしめ、ナポレオンの猛威を挫けり。今
これを、日本海上僅に三十時間の戦闘を以て、敵が過ぐる九
箇月間、慘憺たる苦心を重ねて、東航せる三十八隻の大艦隊
を全滅せしめたる、我が東郷大將の偉功に比す、其の世界歴
史に光彩を寄與するもの、正に伯仲の間にありと云ふべし。
宜なるかな、世人東郷大將を呼んで東洋のネルソンと稱す
る事や。

余は今、日本海海戦の側面觀ともいふべき大將の逸事を

ネルソン 西紀一八〇三年
地中海艦隊司令官に補せ
られ、一八〇五年、トラ
ファルガルの海戦に戦歿
す。年四十八。
トラファルガル イスパニ
ア南西部カデス州の海岸
ナポレオン 佛帝。西紀一
八〇四年から一八一四年
まで在位。一八二一年、
セントヘレナ島の配所で
歿す。年五十三。

記して戦勝の偶然にあらざりしを明かにせんと欲す。震天動地の大海戦、今や開始せられんとする時、大將は旗艦三笠の司令塔に在りしが、其の胸中作戦の計畫既に成りて、おも

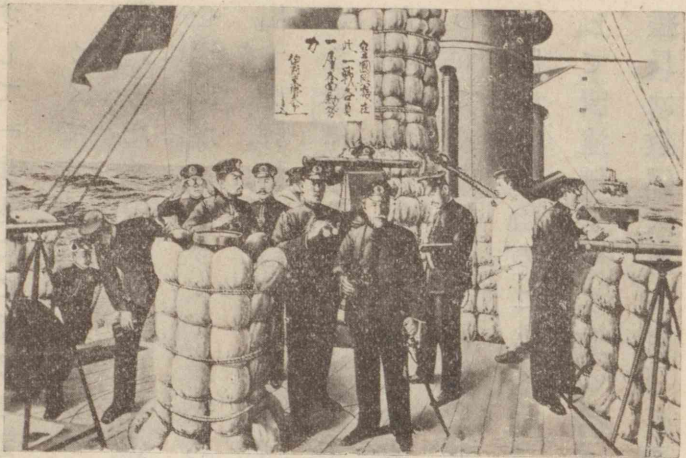


むろに艦橋の上を歩めり。其の沈着なる態度、大戦の將に至らんとするを知らざるもの如し。

時に加藤參謀長、秋山參謀、大將の危険を憂へて、「千金の御身なり。かゝる危険を冒し給ふべきにあらず。冀はくは司令塔中に入りたまへ。」と云ふに、大將は疎髯を捻しつゝ、莞爾として、「好意は謝す。然れども予すでに年老ゆ。今や餘命

挿繪 東郷大將。

加藤參謀長 名は友三郎。當時少將。
秋山參謀 名は眞之。當時中佐。
冒し冒



を君國に捧ぐべき時機到來せり。卿等年なほ壯、我が海軍の將來は卿等に待つところ多かるべし。卿等幸に自重せよ。」と。二氏は此の情厚き言葉にいたく感激せしが、なほ重ねて、「閣下の御一身はわが海軍の消長に關するや頗る大なり。ゆめ、御身を輕んぜさせ給ふべきにあらず。とく司令塔に入らせ給へ。これ君國の爲なり。願はくは疾く。」と、切に其の安きに就かん事を乞ひしが、大將は却つて之を怡ば

挿繪 三笠艦上の東郷聯合艦隊司令長官。

ずして、一步もこの艦橋を退かじの決心を示されぬ。

かくて大海戦はいよ／＼開始せられぬ。砲聲殷々、硝煙漠漠たるたゞ中に、大將は望遠鏡を手にしたるまゝ身動きもせず、たゞをり／＼微笑して快哉を叫ぶのみ、彼我の打ち出す砲弾、恰も急雨の亂下するが如く、面を向くべくもあらざる中に、大將は從容として立てり。漫に膽甕の如き相模太郎の風姿を想ひ浮べしむ。兎角する中に敵彈飛び來り、大將の立てる艦橋の下に爆發して、破片其の身邊を掠めぬ。而も大將は不動、山のごとく、いさゝかも驚ける氣色なく、從容として望遠鏡を手にせるまゝ、仔細に戰狀を觀望せり。伊地知艦長は、敵彈大將の脚下に碎けしを見て、大いに驚き、倉皇其の傍に走りゆきしに、大將は平然として、そのあわたゞしさ

相模太郎 北條時宗。

伊地知艦長 伊地知彦次郎。當時大佐で、三笠艦長であつた。

は何事ぞと言はまほしげに、莞爾として面を向けぬ。この光景を目撃したる味方の士氣は愈振ひぬ。皆口々に、大將は神にして人に非ず。露艦の撃ち出す彈丸、大將の脚下に平伏せるぞ可笑しきと、大笑しつゝ、砲撃をつゞけぬ。幾何もなくして敵艦大破し、多くは戰鬪力を失ひて全滅に歸したり。斯くの如くにして、未曾有の大勝は我が軍の手に收められぬ。沈勇東郷大將の如きは、蓋し稀に見るの偉人と云ふべし。嗚呼、日本海海戦の偉業や、此の人にして初めて成し得たるもの、皇國の興廢この一舉に在るの秋、天この偉人を降下して、我が國土を幸せるにあらざるなきか。

—(忠烈美譚)—

二三 我が國民性

芳賀 矢一

我が日本國は、氣候は溫和である。山川は秀麗である。花・紅葉、四季折々の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは當然である。四圍の風光の凡てが笑つてゐる中に、ひとり住民だけが笑はずにはゐられぬ。現世の生活を樂しむ國民が、天地・山川を愛し、自然に憧れるのも當然である。この點に於て、我々は實に天の福德を得てゐるといつてよい。殊に日本人が花鳥風月に樂しむことは、吾人の生活の各方面に於ても見られるのである。

上代に於ける衣食住は、多くは我が國土に繁茂してゐた植物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤・葛を以て括り

芳賀矢一 福井市の人。文學博士。國文學者。東京帝國大學名譽教授。國學院大學々長。昭和二年歿年六十一。

つけ、楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれを染め、蔓草を取つて襪とした。日本の女の子の着物の模様のはてやかなことは、西洋人の著書によく歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ綺麗である。それがやがて衣服にも移つて來るのである。昔のしのぶずりも、今の裾模様も、つまり同じことである。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染め出した友禪縮緬や襦袢の帯から下駄の鼻緒の先まで、草木の模様で飾つてある。色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色など澤山ある。中古の女裝束の櫻重ね・梅重ね・山吹重ねなども、四季折々の花に因んだのであつた。

やさしい女流のは當然ともいはずが、武士の戦争に立立つ甲冑にも、小櫻緞・卯花緞・澤瀉緞などいふのがある。いかに

櫻重ね 裏の色目の名。表は白、裏は赤。女房のは上に白を重ね、下に紫を用ゐた。冬から春にかけて着用する。

梅重ね 表は濃い紅、裏は紅梅。十一月から翌年二月までの用。

山吹重ね 表は薄朽葉、裏は黄色。女房のは、上から下まで山吹色を重ね、單を青くする。

も優美ではないか。また旗やさしものに、蝶や笹龍膽や澤瀉をつける。皇室の御紋も菊桐で、徳川家のは葵である。今日の家々の定紋にも、桔梗、櫻、梅鉢、牡丹、鳶、藤、松の類が最も多い。

それから食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅、牡丹餅を始として、菓子屋の目録を一見すれば、一層その多いことが解る。形も花木に取るのが多い。干菓子には別して多い。汁粉には十二箇月の雅名があり、酒にも櫻、正宗、菊、正宗がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ゐられ、魚類の料理にも植物を用ゐる。牡丹餅を贈るには重箱に南天の葉を敷く。その他庭園の構造でも、室内の裝飾什器でも、家屋の建築でも、凡て植物を用ゐる。自然のままの趣味を有してゐる。

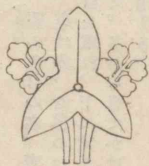
挿花の術、箱庭作り、繪畫など皆、我が國人獨得の伎倆で、特

小櫻絨 小櫻草(地を藍染にして、白い小櫻の花形を染めだした草)を細く裁つて絨した鏝。卯花絨 全體、白糸で絨したものである。澤瀉絨 種々の色糸で上を狭く下を廣く、おもだかの葉の形に絨したものである。

龍膽



澤瀉



殊の發達をしてゐる。凡て花を生けるにも、これを描くにも、その生きたまゝ、自然のままにするのが美しいのである。枝をむしりとつて花ばかり花瓶に挿しこむのは西洋の風であるが、自然の幹枝をそのままに、天地の配合を宜しく現すのが、生花でも盆栽でも日本人の好みである。日本人は自然の友である。眞に自然の心を理解したものである。

我が國の文學に自然を吟詠したものの多いことはいふまでもない。繪畫が花鳥を以て優り、彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が國の文學が自然美を歌ふのを長所とすることが解る。誠に上古から近世までの歌題の大半は、花鳥風月であつた。軍記、謠曲、淨瑠璃なども、叙景の文を點綴して精

采を生ずる。俳句に至つては、季のないものは句にならぬことになつてゐるのである。凡そ四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことがない。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、即ちあはれを知ることである。

源義家や源三位頼政や平忠度等が、日本武士として優にやさしく感じられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからである。英雄豪傑ばかりではない。日本人ほど國民全體にあはれを知つてゐる、即ち詩人的な國民は、恐らく世界中にまたとあるまい。歌心は誰にでもある。歌は作らぬまでも俳句を作る。上手でなくとも何人も作る。花見、遊山の時にも一興とする。春は花、秋は紅葉、詩人的國民は誠に遊事に忙しいのである。

—國民性十論—

歌心よまろす心

アビエト

時にも一興とする。春は花、秋は紅葉、詩人的國民は誠に遊事に忙しいのである。

—國民性十論—

アビナト

國語假名遣一覽

△國語には發音が相似てゐて、それを記す假名の同じでないものがある。
 △本表は記憶に便するために、少數のものをあげて他を類推せしめる。

<p>最モ少イのヲ暗記スル。其ノ他ハイカ ひデアル。 む(井・堰) む(田舎) むもり(蟬蛻) む(居) むざり(膝行) むしき(臂) かもゐ(鴨居) しきゐ(鬮) くもゐ(雲居) くらゐ(位) しほゐ(芝居) とのゐ(宿直) とりのゐ(鳥居) まとのゐ(團樂) もとのゐ(基) む(猪)(亥) むくび(猪鬃) むのこ(豕) むのしし(猪) いぬゐ(乾) む(蘭) ふとのゐ(榮) む(藍) くれゐ(紅) あぢさゐ(紫陽花) うなゐ(髻髮) かたゐ(食) くわゐ(慈姑) せゐ(所爲) なゐ(地震) むゐ(率) ひきゐる(率) もちゐる(用)もちひる(トモ)</p>	<p>みづのえ(壬) え(枝)柄 しつえ(下枝) ずはえ(條) ながえ(轆) え(江) え(笛) のどぶえ(吭) むえ(鷓) ひえ(鴨) ひえ(鴨) ひえ(鴨) さざえ(蝶) あえる(宵) あまえる(甘) いえる(癒) いばえる(嘶) おびえる(脅) おほえる(覺) きえる(消) きこえる(聞) こえる(越) こえる(肥) ここえる(凍) すえる(饑) はえる(榮) ゆふばえ(夕映) はえる(生) ひこばえ(葉) ふえる(殖) ほえる(吠・吼) みえる(見) もえる(燃) もえる(萌) もえだ(悶)</p>	<p>みま(深・水脈)……みをつくし(溼標) わさ(委) ます(申) し(可憐) やま(徐) ふ(書イテ)をト發音スル場合。 あふ(葵) あふ(仰) あふ(扇)……あふ(扇) あふ(扇) あふ(棟・樑) あふ(近江)……とほたふ(遠江) さ(昨日)……けふ(今日) さ(昨日)……けふ(今日) た(と)し(貴) は(る)投 た(と)し(貴) は(る)投 ふ(く)ふ(鼻) か(げ)る(陽炎)</p>
<p>まゐる(參) 語頭デハハイト發音スルコトハナイ。紛レ易イノハイトゐデアル。前ニ掲ゲタゐノ他ハ皆イデアル。 語中・語尾デハハイトトヒガ紛レ易イ。ゐヲ用フル場合ハ前ニ掲ゲタ。次ノイヲ用フル場合ノ他ハハイトデアル。 おい(老) くい(悔) むくい(報) 音便(きし)ガ(い)トナルモノ。 しい(四時) しい(詩歌) むいか(六日) さいたま(埼玉) さいは(幸) たいまつ(松明) ついぢ(築地) きさい(后) ひいき(最良) ついたち(朋) ついで(衝立) やいば(刃) ついで(序) かうがい(筭) かい(書きて) さい(咲きて) ない(泣きて) あしい(思し) おも(重し) かなしい(悲しき)</p>	<p>お(男・雄・天・牝) を(男) たけ(猛男) みやび(風流男) を(雄々) を(夫) ます(丈夫) め(と)夫婦 やも(鰥夫) を(甥・姪) を(牝) を(小) を(伯父・叔父・老翁) を(伯母・叔母) を(少女) を(峯・岑)……を(峯上) を(尾)……を(尾花) を(緒)……を(纏) を(麻・芋) を(麻) け(麻) け(麻) を(蔵) を(蔵) け(芋環)</p>	<p>語頭デハハトハハイト發音スルコトハナイ。語中・語尾デハハイト發音スルコトハナイ。次ノ他ハハイト用フル。 あ(泡・沫)……み(水沫) い(わ) じ(口輪) くる(郭) く(わ) じ(慈姑) こと(わざ) じ(慈) こと(わり) 道理 こ(わ) じ(聲色) さ(わ) や(吹) こ(わ) だ(聲高) し(わ) じ(皺)……し(わ) じ(皺) た(わ) や(手) じ(弱女) た(わ) や(手) じ(弱女) た(わ) や(手) じ(弱女) は(ら) わ(野分) は(ら) わ(野分) ひ(わ) じ(倉皇) あ(わ) つ(周章) あ(わ) た(倉皇) う(わ) り(乾・渴) こと(わる) 断理 さ(わ) じ(騒) す(わ) り(坐) た(わ) じ(攪) し(わ) じ(答) よ(わ) じ(弱)</p>
<p>ひ</p>	<p>を</p>	<p>じ</p>
<p>い</p>	<p>は</p>	<p>は</p>
<p>み</p>	<p>わ</p>	<p>は</p>

國語假名遣一覽

△國語には發音が相似てゐて、それを記す假名の同じでないものがある。△本表は記憶に便するために、少數のものをあけて他を類推せしめる。

Table with columns for kana characters (え, え, ひ, い, む, へ, を, ほ, お, づ, ぢ, は, わ, づ, ぢ, は, わ, づ, ぢ, は, わ) and rows for various words and their readings. Includes a large explanatory text block on the right side of the page.

大正十年	昭和四年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十三年
十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日
月廿一日	月廿四日	月廿八日	月三十日	月三十日	月三十日	月三十日	月三十日
訂正六版發行	訂正七版發行	訂正八版發行	訂正九版發行	訂正九版發行	訂正九版發行	訂正九版發行	訂正十版發行



新制中等新國文 全十册
定價各册 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
右相續者 三矢夏井
補訂者 鳥野幸次
補訂者 折口信夫

發行所 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社

印刷所 東京市本郷區眞砂町三十六番地 日東印刷株式會社

發兌 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社

關西一手販賣所 大阪市西區靱北通二丁目 株式會社 盛文館

電話 大坂市西區靱北通二丁目 株式會社 盛文館
振替 貯金口座 大坂七四三番

